Jun. 1892
no. 321-1

女學雜誌

第三百二拾一號
甲の巻

明治二十五年
六月十八日發兌

注意

社説 **人生大時機**ならびに**慣習一新小策**は人の道念を開養し其德性を練磨する五六の大機會を列擧し社會上慣習の大ひに改良せざる可らざるを論辨す。**東花坊我れと刺激す**の一篇は言ひがたき戀と云ふ者の情緒を悉し **小説中の女主人**はゼチザ、エリチツトが小説中の女主人公を論評す。**人さま〳〵**は若松しづ子が種々の人物を寫すものにて今回は文學者のホームと題し、書齋に於ける文人の一僻を穿ち **紅樓夢**の一節たる**風月寶鑑**の辭は世界に有名なる支那一大小説の標本にして其一節を和譯したるもの。近松巢林子が**歌念佛**の細評は透谷が筆にて例により戀思愛情の極秘を穿鑿したり。亦た今回より月一度の附録とする**教育學**講義**附録**は第一章教育とは何ぞやの段にて古今の學説を擧げ遂に講述者が一家私見を述べたり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 321. June 18th. 1892.

EDITORIAL :—Epochs in Human Lives.

LEADING ARTICLES.—Love and Silence. George Elliott's Heroines.

NOVEL :—"Men and Things," (1) A Chapter in Kōrōmu, a Chinese Novel.

CRITICAL NOTES:—

MISCELLANEOUS :—A Bird's-eye View of the World.

CURRENT EVENTS :—

CONTRIBUTIONS :—Why Do Our Young men Age so Fast? A Japanese Translation of "Zensekihekifu," a Chinese Sonnet.

SUPPLEMENT :—Pedagogy. (What is Education?)

CONCERNING WOMEN:—

THE FRIEND OF THE ORPHANS :—

本號（第三百廿一號）白表

●社說　人生大時機〇慣習一新小儀

●論說　東花坊、我を刺激す（天知子）〇ジョージ、エリオットが小說中の女主人公（無名氏）

●小說　人さま〴〵（第一、文學者のホーム〇若松しづ子）〇紅樓夢の一節（風月寶鑑の辭）無名氏。

●批評　巢林子が歎念佛を讀みて（透谷）

●雜錄　天地管見（倫理神理の講究。兒に對する愛。事業成否鑑識の法）

●時事　副島伯〇同胞の出稼人〇時事片々

●寄書　靑年何ぞ老ゆるとの早き（文醜眞逸）〇前赤壁賦の和譯（立花寬篤）

●附錄　敎育學講義（敎育とは何ぞや）

前週（第三百廿號）赤表

●社說　滔々たる世上の母、多くは其愛子を殺す

●兒籃　香宿の花（第四回中）若松しづ子

●雜錄　鎌倉に妹を想ふ（暗光子）〇女子敎育に於ける經歷及經驗（櫻井ちか子）

●史傳　賢母の贊（ナポレオンの母、アウガステンの母、カーライルの母）。

●家政　早起快然

●批評　「吾黨之女子敎育」の序

●拔萃　どもりの匡正法

●寄書　脚氣預防法〇無錢馳走の秘傳〇臭氣と泥棒との關係の考〇夏はツヤム〇米の直段〇夏を涼しくする法〇節儉々約〇淸書の用紙

●閑書　米國の通信（山脇花子）

●女報

●孤友　同志社病院に於ける石井十次君〇孤女學院報告

前々週（第三百二十號）白表

●社說　無聲の聲、不動の動〇關西地方漫遊所感

●論說　俠客論（天知子）〇英雄豪傑彼れ何者ぞ（山月子）

●小說　我牢獄（脫蟬子）

●文藝　西行詠花詞十八首（無名氏、撰）

●雜錄　基督の摸範の序（ベルベッキ博士作、若松しづ子譯）天地管見（小引。鑑識の明）六合學人〇立脚の地俊傑を産出す（畜齣子）

●批評　木村芥舟氏の三十年史〇紅葉山人の二人女

●時事　討論仕合の禮容〇日本治安の文明度〇學者責任論〇大臣と貴族院〇我日本〇政府と保守黨

●女報

●孤兒の友

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿一號
明治二十五年六月十八日發兌

社說

人生大時機

地の表は一連續せり、然れども之に山の高きあり、谷の低きあり、川の長きあり、野の廣きあり、所に隨ひて形を異にす。天の底は一平面なり、然れども之に白雲の漠々たるあり、黑雲の蟠かまりて破れんとするあり、紅雲の顏を赤ふして宴樂するあり、奇雲の峯巒々として空に聳ゆるあり、方に隨ひて景を異にす。人生亦た斯の如き者あるか。其因縁する所を考ふれば、前后左右皆相關係し手を握りて相連接すと雖ども、時に亦高低長廣の異、集散樂苦の變なきにあらず、之を人生の時機と云ふ。時機に大小あり、其の大ひなる者を大時機とす。大時機は即はち人世路上最大變化あるの機會にして、惣ての精力、惣ての方便、惣ての運命、惣ての天助、手を供し足を歛だてゝ待てり。神、光あれと言たまひければ光ありき、夕あり朝あり是れ首の日なり。神言たまひけるは、水の中に穹蒼ありて水と水とを分つべしと、夕あり朝あり是二日なり。かくして遂に七日を區限す。其區限は即はち天地創造の大時機なり。ダルヰンと同に万物は皆な進化すとなし、進化の道は、度の相違にして類の相違にあらずとするも、見渡す限り、動物と不動物と生物と不生物と万物と人靈と、其間に今は渡る可らざるの谷を存す。惟ふに、此岸より彼岸に進化するに當ては、蓋し異常の變化ありて生ぜしなるべし。之を進化路上の大時機とす。人生亦斯の如き者あり。

瘋人ひとり狂ならず。健全の人多くは狂す。酒客ひとり醉はず、白面の人多くは醉へり。稱して人情に通ずと云ふもの、安んぞ人情界の無學者ならざるを知らん。蓋し思ふに、吾人は、多くは俳優なり、聲音遣ひなり、演説家なり。世人皆な醉へり、吾も亦た醉へり、世人皆覺めず、吾も亦覺めず。嗚呼吾人々類の大多數は、必竟天地間の無學なる小兒痴人にはあらざる乎。

たゞ此の痴人小兒を敎育し、其本色に返りて當然の人物に發達せしむるの途、古より具さに備はりて存す。此途に入るものは覺め、此途に入らざるものは眠る。此途は、光明の道な

り、生命の道なり。吾等こゝに入りて、明あり、こゝに入りて生命あり。

人をして、此の大道に入らしめ、此の大道に入りて其本色に悟到發心せしむるに一の門あり。此の門に額を懸く。顏して人世の大時機とあるは即はち是れ也。

吾黨つら〳〵世の人の平素爲す樣を見るに、彼諸君、多くは此の大時機に掛念せず、首を擧て此の額を見、嚴然として注意するとなく、大抵飄然として其下を一過す。此に於てか其門を入ると雖ども、遂に光明の道、生命の道に悟到發心するとなし。

吾黨つら〳〵世の人の平常「教育」と云ふものを施こすを見るに、細々として文字を教え、凡々として常路を示し、碌々として俗界衣食住の方便を與ふるの事を爲すとは雖ども、所云る大時機に接して、靈性を發揮せしむるの工夫を與へず、天與の好時節を空に過し、春宵の一時を味あく送らんとす。何ものゝ遺憾ぞ能く之に及ばん。

物を剝ぐは縫目よりし、蒼天を窺ふは雲の破れ目よりす。此の人生の破衣を剝ぎ、其眞相の面を現ぜしめんには、折々に其機會を示す光線透射の間隙よりせざる可らず。天神少しく天戸を開くときは、手力雄命全力を揮ふべきの時なり。機會一過すれば、車輪一轉せり、長日月の後にあらずば亦復廻り返らざる也。

左れば、人生の大時機は、人の尤とも注意凝念すべき期限なり。機一發、もし之を空過せしむれば、駟馬も追ふと能はず、電光も從ふと能はず。

吾黨つら〳〵此の所云る大時機ある者を考擧するに、大凡そ幻の夢を破りて天の朝たを示すもの、皆な此の類中に入らずと云ふとなし。花の夜半に散りて朝日に悄然たる樹枝の形骸を示す、月の村雲に閉ぢて玉樓欄干の佳人を怨悶せしむる、または流水の限りなく流れて四時所を一つにせざる、浮雲の離れまた合し片々落々として朝夕其の團結と伴はざるなど、もしくは、秋の夕ぐれのさびしき、春の宵の物足らぬ、空中の一鳥の高く飛ぶ、魚の悠々として所得顏なるなんど、何れか皆な大ひなる道德教を說くの機會ならざる可き。

然れども尙ほ此等にも増して大いに教ゆる者は、男女の新枕をつくる時、人の子の新たに生るゝ時、ホーム及び友と別れ

て旅行する時、天變地災に遇ひ一朝身事を忽變する時、病む時及び病める者に接する時、死する時及び死者に接する時、ああ万事休するか吾が愛すべき人々の亡骸を野邊に送り之を冷たき土中に埋葬する時、凡そ此等の時は即はち人生の最大時機にて、人の最高最强なる說敎を謹聽すべき時なり。雲は漠々たり、もし只だ雲つ表をのみ見る時は天は只だ漠々たるもののみ。然れども其后面に光の赫々たるものあるとを思ふ時は、吾心何如に勇壯なる。吾人が、人の世を見ると亦た斯の如し。彼の、落花の下に小歌をうたひ、杯の上に白頭骨を映して尙ほ宴樂する族は言ふに足らず、やゝ嚴そかに人世を觀ずる者といへども多くは其世相の漠々として無常なるに落膽し、更に其幕后の眞相を見るとなし。大虛の虛、人世は果して虛なるか。ホーマー其イリアドに歌ふやう、

For ther is nothing whatever more wretched than man, of all things, as many as breath and move over the earth.

あゝそれ人は果して前世界に於ける最とも憫れむべきの生物なりや。吾人この憫れむべきものに命を寓し、天地の客となりて逆旅にやどる。一宵の假眠は果して何の爲ぞ。

然れども、此は只だ雲の漠々を見て、天日の赫々たるを窺がはざる輩の癡言たり。人はパンのみにて生ず、カイザルにのみ屬せず、此の世を以て終るものにあらず。故へに、念々刹那の寸刻を壽とし、金の冠したる王のみ戴だき、たゞパンのみにて生活せんと欲するときは、不滿不平鬱結して之れを去ると頗ぶる難し。こは、長久を寸刻に限り、大能を肉人に寄せ、靈の食を麥にて造れるものにて辨ぜんとするによる。不平不滿の生ぜんと固より其數なり。たゞ此の不平不滿あるによりて人を刺激し、以て幻想以外に眞相を看破せしむ。人生の大時機は即はち此の看破を爲すべき好時機なり。故に、吾黨は頗ぶる此等の大時機を重んじ、此の大時機に對する社會人の注目を惹かんとを欲す。而して又た此の大時機に對する社會の慣習の隨つて改まらんことを熱望するものなり。

慣習一新小策

愛岐の震災は、國民同胞が大ひに警戒す可き時機にてありき。多少は警戒せし人もありしが、暫らくにして早くゆるみたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一般世人に至りては、之を對岸の失火とし、一種奇談の料に供ふる外、大ひに念とする者はあらざりき。所云る「瓦のとはれを以て玩具とするの小兒」あり、寄附金に酒を買ふの老父あり、甚はだしきは、之よりして醜業を爲すの徒、大ひに增加したりとぞ。而して、近來に至り、上流にます〳〵怪聞を生ず。岐阜縣知事は、此の未曾有の天變に乘じ、令尹にあるまじき所行を爲せりと、之れ國民が決して容赦す可らざる疑問あり。是れ金錢の事件にあらず、神聖なる人情の上の大問題なり。吾黨、此時機に注目せざる可らず。

婚姻はこれ二人の人相合するの事、人情の秘訣こゝにあり、交友の眞味こゝにあり、團結同勞の主旨こゝにあり、高潔の愛獻身の德こゝにあり、四海兄弟の種こゝにあり、實に人世大禮の最大なるものなり。此時尤とも嚴そかならざる可らず、此時尤とも愼しまざる可らず、此事尤とも鄭重ならざる可らず、從來我國の婚姻の如き、女子を以て婢に遣はすなり、一個人の靈を家の爲に沒するなり、相愛せざる者浮たる契約を結ぶなり、眞の夫婦ならざるべき男女相い節を解くなり。當に戰栗すべし。然るに近頃法典延期論者の文中驚ろく可き繼野の盲を弄して、日本婚姻の弊風を永久に維持せんとするは、何等の妄見ぞ。同胞婚姻の眞主旨を知り、其の人生の大時機たる所以を悟らずんばある可らず。

旅行に至ては、彌二郎喜多八の滑稽談深く邦人を毒す、吾黨は旅行の德の爲に彼の著書を火かんとを熱望す。旅中客舍は尤とも都合よき說敎場なり、宗敎界の傳道者は此の好時機を利用せざる可らず。吾黨の友某は、有爲の才を懷いて故國に入り、自から温泉場を築きて其主人たらんとす。蓋温泉場の閑雅は甚はだ傳道に便あり、之が主人となりて浴客に說き、混々たる淸泉を以て其靈躰を洗はんとするは、極めて好きと也。旅行に於ける客舍亦た當に如此なるべし。旅行者須からく嚴肅に沈思すべし、同胞また此の大時機利用の好方途を考ふべき也。

吾黨は、今の病院及び看病婦に憾みあるや久し。彼等は、病に慣れて之を常とし、苦吟嘆叫を耳て談話となす。一と度び今の病院に入りて今の看病婦に待せられたるものは、何人か之が改良策に鋭意せざる者あらん。人は固と獨立自營すべきものなり、然れども痛める時は當に人の助けを受くべき也。

四人、病者をかつぎて行くは人生當然の務めとす。此の務を課して人相助け相慰さむるの敎となす、病者を見るときは則はち之を溫遇看慰すべきの義務ある也。且や病者自身は、此時に於て大ひに反省すべき機會を與へらる、此の反省を爲すは病者の責任なり。病に如此き意義ありと信じ、感謝して之を善用せざる可らず。而して之が爲めには、病院及び看病婦たるものゝ好く此の大時機に適合することを要す。

目今死者を送るの慣習に至りては言ふに忍びず。手に唾して死者の骨を折り曲げ小さき棺に押込むもの、鐵槌を揮ひ釘を插し音を高ふして棺蓋に打込むもの、下賤の匹夫白丁を着て棺を荷ひ亡骸の下に輕談高笑するもの、義理一邊に送葬し途中世間ばなしに喧しき又は車上にて居眠りするもの、坊守意味なき經をくりかへし布施の多少によりて聲を長短高低し鈸を響かせて愛なきことを示すもの、棺を繩にて縛り土中に吊り下げ石塊大砂を足にて蹴落すもの、會葬者接待の菓子貧相なるにつぶやくもの、其一つ二つを懷ろにして歸るものゝ如き、あゝ何んぞ一々擧るに堪へんや。吾黨は固より基督主義の埋葬を好む。されど、若し悉とく之に改むる可らずとせば、送葬埋納は總べて、死者の友人の手にて辨ぜんことを欲す。安くんぞ、最后終末の見送りを、心なき匹夫下郎の泥手冷掌に委することを得ん。

凡そ此類の改良はたゞ其見易き例を擧たるのみ。人世大時機に際する吾黨の盡力は極はめて信切ならざる可らず、こゝに其二三を列擧して言盡しがたき衷情幾分を告白し、以て世上同志の人の注意を引く。

論說

東花坊、我れを刺激す

天知子

禪家東花坊俳諧を極めて調味深し、嘗て「吹毛の劍や春三月、斷腸の牡丹花下の風」と倡して禪想を嘖々せしめたるの人なり、彼れが「牛呵る聲に鴨立つ夕べかな」と吟じたるが如き、大驕を以て大寂の餘韻を現はし、大俗を以て大聖の風光を描き、而して無雙絶妙の靈を吐く、嘗て彼れが巴靜なる人と一日伊勢に旅せんとして、桑名の渡し舟に言ふ可らざる絶美の

春景色を見る、巴静一句を所望す、東花言へらく、古人も景色に逢ふては啞と成る充分なる所にては句拵の出るものに非ず今宵宿りの炬燵に詠ずべしと、人世の道味自ら籠りて味ひ深し、透谷子が松嶋に芭蕉を讀みて謂へらく、絶大の景色は文字を殺すものなり而して倘「我」をも沒了し去るものなりと、吾れ常に此感あり、端なく東花坊が想を按じて更に感ずる所のものあり。

ダニユーブ河の寒風に吹かれながら美を頓悟したるデカートも、牢獄の鐵鎖を樂境なりと悟りたるソクラチスも、雨に向ひて月を戀ひ散り萎れたる庭を見所多しと言ひたる兼好も、人世の道味、捻華微笑實に爰にありて存す、男女の情も偏に逢見るをば言ふものかは、逢はで止みにし憂を思ひ、あだなる契をかこち、長き夜を獨りあかし、遠き雲井を思ひやりて、喞ちたる言語こそ、人世幽玄の趣味、妙境爰にこそあれ、苦境の叫び發して絶妙の詩歌と成る、人は苦を惡みて實は苦に感謝するものなり、苦境の一微光之れ實に人世絶大の快樂なれ、沒苦樂是れを樂土と言ふ、空苦樂是れ人の樂味ならんや。

吾れに愛する妹の一人、此頃遠きに遊びて優しくも花二つ三つと磯の小貝を齎らして送りこす、其包紙に記すらく「〇〇山の岩がねの苦しき中に咲きける花、〇〇濱邊のあら波を忍びたりし貝二つ三つ奉る」と、愛の切々たる、趣味此無邪氣なる短句中に現はる、吾れに取りては人世至樂の善智識、恍として思はず机を打ち、而して愛味に醉ふて微笑す、胸間の囁き偏へに閑かにして、大勇、大俠、英雄、偉人實に玆なり這里なりと頷す。

嗚呼人世は苦の鎔爐か、苦沸騰熔解して始めて人の人たる所以を造り、樂の樂たる所以を造り、愛の愛たる所以を造る、人世に樂土なし幸福は唯墓場の彼方に在りと冷悟せし者未だ迷へり、人世皆快樂到る所苦境なしと言ふ者亦迷へり、然れども苦みて苦に堪ゆるは未だし、喜びて苦を迎ふるは頗る達せり、去れど知らずして苦に鍛ゆるの人最も至れり。

吾れ眼を轉じて今日の世況を見るに、荒涼たる原野に花稍々咲くの趣きあり、人間最源至根の愛を説く者多きは悦ぶべし、然れども愛の妙を輕々しく解釋し輕々しく信ずるに至りては、其弊を嘆ぜずばあらず、愛せられて愛を賞する者は未だ穉感なり、愛の説明に愛を得たりとする者は未だ醉者なり、

愛する者のみを愛するは未だ小見なり、愛するが故に彼れ我れを愛するよう成らしめしは長入なり、愛は夫れ強ち軟かなる者に非ず、愛の骨なくんば愛の肉なし、故に軟骨者は愛に擬すべくして學ぶ可からず、愛は夫れ強ち笑ふものに非ず、愛の嚴なくんば愛の微笑なし、故に空笑空慮の者は愛の笑を擬すべくして消化し難し、嚴肅なる中に現はるゝ一閃の一微笑こそ、能く胸底深き所に潜む万斗の愛を現はすなり。愛は夫れ強ち口舌を借るものに非ず、故に沈默無言にして能く語る、無言の愛ある者能く無言の愛を知る、愛は實に實行のものなればなり。愛は夫れ深大壯重のものなり、故に淺薄無凄の者は愛の一端を嘗むべく、到底其深重なる所を味ふ可らず。愛を學ぶも亦、知らずして鍛ゆるの困苦より來るか、困苦は筋肉を固ふす、況んや情をや、況んや愛をや。愛の妙機知り易からず、東花が「牛呵る」の句、爰に至て又趣味あり。

小說中の女主人公

ジヨーヂ、エリオット　　無名氏譯

そもそもジヨージ、エリオットの小說を讀みて女子の位置に關する渠の所見を聽かむとするものは、先づ渠が晩年の作を味はざるべからず。これ渠の初作についてこれを聽き難しといふにはあらず、予はたゞ渠が晩作を味ひみて其觀念の沈刻なるを重しとするなり。ジヨージ、エリオットもその始めて小說を作りしや、ひたすら意をめづらしく談話をおもしろうせんと勉めたれば、渠がみづからの經驗を記臆のうちにもとめこの風雅の籠中よりゆたかに人物と事變とを選み出せることあきらかなるべし。その始めて "Adam Bede." を作りしときも、これに次で "Mill on the Floss." を作りしときも、あれの實を引てこれをその小說なる虛界に溶化するさま殆ど渠が自叙の傳記を語るに似たり。これに次で "Silas Maner." 出で、"Felix Holt." また出でたり。されどこの二小說は女子の人物を客位に轉じたれば、その巧なす筆の迹も讀者の雲烟過眼をとゞむる能はざるべし。

凡そ天地の精華は造化の秘惜するところなればこれを山嶽の蒼烟にかくし、これを江河の狂瀾におさめ、これを高才達人の想見に寄す。かの "Adam Bede." の作者ジヨージ、エリオットがひとたび「メモリー」の摸範を脫して遂にゆたかなる「想

像」の美術界に躍出し、こゝに"Romola."を作り"Middlemarch."を作り"Daniel Deranda."を作りたるは渠が一段の眼をみひらきて古人を相手に風雅を爭ひたるものといふべきなり。

これら小說のうちにあらはれたる「ヒロイン」は渠が初作のうちに畫かれたるマッヂー等に比べて鋭意躁急なるところをあらはすこと少なしといへども、一骨一髓よく畫き難きに入てこゝに高遠なる思想を寄せ、その心神と狀貌とを問はず能く紅塵の俗泥を拔くがごとき趣をそなへたり。もし想波の深くして而も寂たると「サゼッション」の高くして而もとうときとを論ふときは初作の避くべきところ豈それ三舍四舍のみならむや。ましてやその風雅の題目の重複にして月下詩刀を磨ぐの趣あるをや。

エリオットが初作と晩作との相違すくなからずといへども、そのいちじるきものは主客の顚倒なるべし。かれは女子をもて小說の客となし、これは小說をもて女子の性情と生涯とを寫さむとせり。この故に「ヒロイン」最もその局面に活動して紙背あはれにいみじき聲を發す。噫渠いたづらに女子の爲に其氣を吐くのみあらむや。

蓋しジョージ、エリオットが詩筆を揮て風雅の壇上にあらはれむとするや、一の大目的を成さむがために其力を詩神の前に犧牲となせしものなり。大目的とは何ぞや。渠は「理想」なるものゝこの實質界に現ずべきを確信し、詩刀を借りて想實二界の間に橫はる暗幕を破らむとせしなり。

誠よ。マッヂーは渠が初作のうちの「ヒロイン」なり。その弟トムが獨り「エヂュケーション」の餌を拾ふを見て、おのれまた眼を智識の庫にさらしいかにもしてその天賦の發達を得むと希ひ、トムのひやゝかなる心情にかへて同感のおもひに厚しといへども空しくその運命のために葬られ、かくて悶絕の牢獄に花の車を落すよしを寫したり。

ロモラにいたりては然らず。マッヂーは軒々として千里の牡馬にも似たり、これは神姿高徹にして鸞鵠のとうときにや似るべからむ。特にその貞烈にして謹愼なるはいたくマッヂーとその趣を異にせるがごとし。ロモラは勉學にそのかよわき天質をなげうちて人を驚すべき才藻を發露せむとせず。天地の間おのれの爲に一物も求めずしてたゞその父を助けむと思

へるのみ。よこしまなき思ひをもてその孝養の道を脩め、一心のそゝぐところ鬼神をも泣かしむべきは實にロモラの性情にてありけり。マッジーの讀むべきは紙魚の食ふべき書籍にてありなむ、されどロモラの讀むべきは人生の價値といふものなりしにあらずや。マッジーは智識の希望とおのれの運命との間に戰ひ、ロモラはおのれの孝心と夫の不幸との間に狂せむとす。たれかロモラのあはれむべきを思はざらんや、

"Middlemarch." のドロセアにいたりては更に一歩を轉ぜり。凡そ世の小說のうちに最もけだかく最もうつくしき女子ありとせむか、ドロセアは即ちこれなるべし。その位置はマッヂーより高く學問に長じ萬事に堪能にして、こゝろだて善くおもふところ深し。世に幽意の女なありドロセアもまた其一人に數へつべし。世に溫潤の女あり、ドロセアもまた其一人なるべし。これを望めば柳をわけて水を觀るがごとく、これに就けば梅の花の白きに似たり。さればドロセアは慈善を好みて身錦繡のうちにありといへども伏屋の貧の詫を忘れず腸を孤兒の泣聲に斷ちてあはれなるものにその熱絕の涙をそそぐ。ロモラは孝貞の全ふしがたきを哀み、ドロセアはその哀めるものを哀めり。かれのあはれむべきは、これのぞうとむべきにいづれぞ。

噫。一字は一字より多くその人物を活し、一行は一行より多く天地の精華をうごかす。あはれその筆は奪うべきも、そのこゝろざしは奪ふべからざるにや。

小說

人さま〴〵

(一)主人の不機嫌

若松しづ子

ある夕暮れのことで、主人がたつた今暖室爐の槇を丁寧に積み擧げ、上靴を足の先へ突掛け、どふやら懸つたさうに雜誌の切れ殘つた紙へナイフを入れて居ると、そこへ出て來た奥さんが火箸を取つて一寸一本槇の位置を直し升た、スルト主人が

おまへ火は其儘にして置いて貰ひ度ネ………餘計なとをしては、いつでも消して仕舞ふではないか。

アレ、槇の間を少し隙せた許りですよ、

ナニ、おまへが火さへいぢれば、いつでもよくしたとはないからだ。

殊さら主人の言葉に反對するかの樣に、槇は間〳〵から眞赤な火焰の舌を吐き、火は主人に對つて齒を鳴らしたり、ケンツクを食わせたりするかの樣でした。地獄の樣に穩當な人間でも、自分の家の火に罵詈嘲弄されて、それで默つて、辛棒はして居られない、主人は腹立紛に、突然足を重ねると其はづみに側に寢て居るマル――（犬の名）に足の先が當ると、キヤンといつた、キヤンといわれたがどふやら癇癪玉の破裂を助けて、今度は思ひ存分に、蹴つて、いよ〳〵聲を立させ、其途端に花子の毛糸箱を倒に落し升た。

アレ、おとうさま！

毛糸箱がひつくり反つたつて、どふしたんだ！どこからどこまで散らかして置くから動くこともならんわ、益に立ぬ、むだなこと許りして居るからどふも困るな。

むだなことですと

といひ升たが、花子は平常節儉といふことを得意にして居る故、勃然としての言葉でした。

むだなことも、時間もむだにすれば、金もむだにするといふものだ、着る物がなくつて、震へて居る貧亡人が幾百人あるか知れぬといふ中に、正義、博愛を口にする婦人どもが好のんで、毛糸などを編んで益にもたゝぬ飾を拵へて居るではないか、貧亡人の爲にするといふのなら、それで譯が分つて居るが、さうでもないのだ、併し今の世の中はみんなそれだな、今の世の中には仁も義も有つたことではない慈善的の組織が有つた處で、それ〳〵みんな吾儘、勝手を働く爲だからナ。

かふ聞いて奧樣が

マア、あなた今夜はどふかなすつて入つしやるんですよ、キツトお心持が惡るいんでせう。それほど物ことが癈頽して居る譯では御座い升まいが、あなたが先日からの御疲勞が出たのでせうと思い升よ。

ナニ、どふもして居はせんのだ、極壯健だが、併し眼の前にあることは見ん譯にはいかんよ。そして序だからいふて置くが、今までの通り、遣り放しでは困るぜ、モツト細に注

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

意して呉なければ行んよ、とき(下婢の名)なども少しもいふヿを聞んのもおまへが餘り緩過るのだらう、暖爐の火を焚き着るとつて、手當り次第紙を攫み出すし、わしの上靴なども謬つた處へ置いたヿがないよ、それから、わしの書齋を花子とマルの遊歩場やら、家中のガラクタを入れる物置にされては困るネ、

といふ中に毛糸のヿに付て叱責された殘念さが胸一杯に疊つて居た花子が、忍音に嘆息するのが聞え升た、父へは後ろを向けて、殊さら精を凝らして、編物をして居升たが、聲は低い中にキッパリと

マアわたしがあんな物の言ひ樣をしたら、直ぐにすねてるのだといひ切られて仕舞ふんだけんれど、

といひ升た。主人は當途なく、火を眺めて居る樣子をして居升たが、花子にかふいはれて、始めて氣がついたヿが有升た。全躰、花子のいつたヿが圖星に當つて居るのであらうか、家も、女婢どもゝ、花子も毛糸のヿも、犬も家內も平常と左して異つたヿはなく、たゞ異つたといふのは、自分がすねて居るといふ譯か！さういへば、自分の犬を今蹴つた時寐て居た處へ呼んではそこに居た樣に命じたヿも屢でした。

それから又機嫌の好時には、花子の毛糸細工の手際を賞めたり、自分の書物の側に女の仕事道具が雜つて居るのも中〱好いものだなどゝいつたヿさへ有つた、さうして見れば論はない、矢張り、外の物は違た處はなく、自分一人がすね者といふヿが分り升た。自分を庇ふとすれば、氣分が勝ぬとも神經がいら立とも言葉を繕ふが、明樣に艶氣のない處をいつてみれば、矢張りすねて居るといふ外はない、原因はといへば、文學で世を渡る人で、さなくとも腦髓の分擔する處が比較的に過ぎるといふ處へ神經の構造が人並勝れて過敏と來居る、それに近ごろは殆んど力に餘る仕事を引受けて居ながら晝の中は面接の外に來る客と應待する、正當の理由が有れば情を忍んで謝絶せねばならぬのを、それ丈の勇氣は振はず、さては寛いで、明日の英氣を養ふ可き夜になれば、晝の祟でさうは行かず、疲れ果てゝ、床に着くはいつも十二時過、塲合によれば、二時にも三時にもなるヿがある、それ故人並の働き樣でさへ引足らぬ英氣をたちまち消費して、あとは本の無理壓で通すヿ故、この通りな失策が出來るといふヿが判然して來升た。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

倉の中の貯蓄を出せば、倉は空虚、消費たり、貯はへたり、出來ぬ道理で、人の精神を爽快にし、公平、愉快、寛大に物との判斷を助ける神經液といふものが皆無になつては萬事の見解が違つて來て、精神の活潑の時とは霄壤の相違のあるもの。總躰を蔽ふて居た汐が引去つた跡は見るさへ、臭ぐさへ嫌は敷泥濘計りですが、是も當人にとつては致方があいとした處で、自分の家から火事を出して、隣が焚臭いといつて知らせに行く樣なとはせぬと、思へば、妻に對し、娘に對し、飼犬に對してとんだ濡衣を負はせたとよと、我身ながら疎ま敷なり、先づ犬よりお詫をいはんと、主人は手を伸し

「マル、一寸來い、

と彼方の隅に頭を垂れて、親しみたげにこちらを眺めておる飼犬に、

こゝへ來いよ、可愛さうにな、中直りをしよう、好し〳〵旦那がすねて居たか？モウ好いぞ、旦那も氣がつひたから堪忍してくれよ、ナ、

「マルはかふ柔和く出られて嬉しさを現はさうとて、ちぎれる計りに尾を振り升た。

それから花子に對ひ、

花子に忠告を謝し升ぞ、おれの厭世的の講話は取捨とも勝手だ。それで仕事のお道具はどこへでも御自由にお入れなさるが好い。

と惜氣なく四方へ詫言をいひ、さて幾數年の夏を越させ、冬を凌がせて呉れた終生の內助者なる夫人、浮くも沈も、屈するも伸るも、千變万化の動靜を悉く知り盡した妻は、夫の譯もなく氣の焦立を見て落着いたとは赤子の齒の生へるむづかりを見ると異つたとはなく、一音詫をいひにかゝる夫に

アレ何んですよ、およし遊ばせ、わたくしはよふく存じて居り升よ、改めて何も仰らずとも。

紅樓夢の一節

風月寶鑑の辭

無名氏譯

これは痴情の爲に病死する賈瑞なる人物を借りて、渠が色則是空なる禪機を悟り得ざりしことを敘せる一節之。賈瑞もと一痴漢にして而も邪僻あるに鳳姐なる女に弄ばれ、その弄ばるゝを知らずして遂に痴情の爲に死せるを

寫したり。

鳳姐といふは王熙鳳なる女にしてもとより刀險の才を有し、飽くまで賈瑞のおろかなるを知り正色をもて其言ふところを斥けず、邪言を用ゐてその心神を迷はしめ、かくてその情念を挑弄して遂にこの風月寶鑑の一段にいたり殞命の大段落に入るの脚色なり。

この風月寶鑑の辭は即ち賈瑞が鳳姐の爲に辱められて家に歸りしより筆を起し痴情に生を喪ふ光景に筆をとゞめたるなり。

花の褪め易きは一睡の中にして尙あやにくに忘れがたきものは戀なるか。賈瑞はこゝに一生の恥辱をとりおのれの家に歸りしが、心はなはだおだやかならず。鳳姐がおのれを玩びしことを想ひて、一度は恨みに胸のふさがりしも道理なり。されどその花の姿の眼に浮びてはまた恨みもならざるに、思ひは懐にむすぼれて胡思亂想に一夜まなこを合せしこともあらざりけり。これよりして賈瑞は鳳姐のことのみ思ひつゞけしが、前日の恥辱に懲りてまた榮府に往かむとはせず。このことその祖父の耳に入るを怕れ、朝夕の矢の催促に身を絞る賈蓉等への銀子を調へむも覺束なし。

あはれよ。戀と負債の手綱を引ては心の駒もしづかならず。渠その日用の工課といへどもいかで浮きたる手につくべき。渠ことし二十歳を越へし身なるに尙いまだ箒掃の友を迎へず、ひたすら鳳姐のことを想ひて實にその面影のみや春の寢覺のまぼろしに通ふ。されば忘れむとして相思さらに深く、身をくるしめ情をいたむるうち、覺えずも病の枕に伏す身とはなりぬ。いかなる故にや心の内膨れ脹れ、食ふもの一として滋味を覺えず。脚より下は綿のごとく、眼のうちは酢にも似たり。あわれむべし渠は瘠衰へて嗽痰には紅き血を交へ、すべて斯程の重症は一年と保つべきにあらずといふに、渠いかでかその苦みに堪え得べけむ。眼も上になりて一の頭の置所さへなく、たゞ〳〵夢魂顚倒してくち〳〵におろかなることのみを言ひあざりぬ。まことにその病狀の世の常にあらざるより、醫師を招きてあらゆる療法を試み、藥には肉桂附子鱉甲麥冬玉竹のたぐひを盡し幾十斤となく飲み下せども利目といふものは更に見えざりけり。

暮れ行く年を送りてまた來む春を迎ふること一夢と思ふ間に

渠の病症は重きを加ふるのみ、いかなる療養もその甲斐なかりしが、こゝに跛足道人といふもの忽然として來り寃業の症を治するに妙を得たりといふ。

賈瑞うちにありて之を聽き、あはれ菩薩の來りてわが一命を救はんとするなり。早くこれを招び入れよとあるに、衆人ぜひなくかの道士を枕邊近く連れ來りぬ。賈瑞は聲を擧げて、菩薩〳〵、わが命を救ひ賜はずやと連叫すれば、かの道士つく〳〵嘆息のおもゝちにて、そなたの病氣はなみの藥にて直らぬも道理なり。イヤこゝに妙藥があれば、これをそなたに進ぜましよう。これを毎日御覧にあれば、そなたの命も保ちますといひつゝ、うらをもて共に人を照すべき鏡をとり出せしが、うへには「風月寶鑑」の四字を鏨着たり。道士これを病人の手に渡し、そもこれはこれ大虚元境空靈殿上におはします警幻仙子の御作にて、第一に邪思妄動の病を治するより濟世治生の功能ある御物。拙者がこれをもちて人間の世に來るといふも故あることと。決してその鏡の正面を御覧あるな。たゞ〳〵背の方のみ照して御坐れ。あなかしこ〳〵、今日より三日目には拙者が參上いたすによつて、その節は「風月寶鑑」を返しなされといひつ、衆人のとゞむるをも聽かずして徜徉と立ち去りぬ。

渠は今道士よりあやしの鏡を得しが、ハテまんざら虛言を言ふのではあるまい。一先その鏡を照し見るべしと、「風月寶鑑」を拿りて反面を照しけるに、一個の髑髏その裡に立ちてありけり。

渠忙しくこれを掩ひかくし、エゝ道士め、うそつきめ。人を嚇すにも程がある。さはいへその正面は如何ならむと、このたびは正面を照しけるに、いかにしけむ最愛の鳳姐その裡にありて首を點き手を招きて渠を呼ぶめり。あやしやと賈瑞は心中に喜ぶこと一方ならず。悠々として心も蕩けなむ計り、覺へず鏡のうちに入りて鳳姐に遇ひしよろこびを言へば、鳳姐また渠を送りて鏡の外に出で來りぬ。アヽヤといふ一聲に一び眼を拭ひ反面を見れば例のかなしげの髑髏のみ。

賈瑞は病床にありて汗しん〳〵と身を侵し、正面を照して鳳姐に招ばれ、反面を照して髑髏にをそれ、かくて三四度も繰返しけるに、二人斗の誰とも知らぬもの馳せ來りて鐵の鎖に渠を卷き、例の鏡を奪ひ去らむとせり。おのれ鏡をわたすべ

きかと一聲高く叫びしのみ復ものを言ひ得ざるに、かたはらなる看護の人々これをあやしみ馳せ寄れば、賈瑞の身はすでに氷のごとくなりてありぬ。

噫代儒夫婦のかなしみは如何にぞや。エヽむごたらしい道士め、サアたッた今賈瑞の體を直してよこせ。サアどうして殺した、どうして直す。この「風月寶鑑」とやらは見るもけがらはしい、こんな妖鏡があればこそ、可愛の賈瑞まで亡いものにしたぞ。夫婦は氣も狂亂の忿怒に堪へずや、かの鏡をとりて火中に投げすてけり。

聽けば何處となく空中に聲ありていふ。たれか儞們に鏡の正面を見よと敎へしぞ、儞們は假のうつゝの夢にうかれて、これを眞と思ふことの愚かさよ。うたてや何の爲に我がこの鏡を燒き捨てしといふうち、かの鏡空中より家の外に飛び出でぬ。代儒門を出でゝ見るに、かの疲足道人わが家の外にありて誰かこの「風月寶鑑」を燒きけむといひつゝ、鑑を搶りてそのふところに入れ、かくて飄然としてその影を失ひたるぞあやしき。

批評

歌念佛を讀みて

透谷

巢林子の世話戲曲十中の八九は主人公を遊廓內に取れり、其清潔なる境地より取り來りたる者は甚だ少數なる中にお夏淸十郎歌念佛は傑作として知られたり。余は歌念佛を愛讀するの餘、其女主人公に就きて感じたるところを有の儘に筆にせんとするのみ。若し巢林子著作の細評を聽かんとする者あらば逍遙先生又は篁村翁が許へ行かるべし、余豈巢林子を評すと言はんや。

中の卷の發端に「かゝる親には似ぬ娘お夏は深き濡ゆゑに、菩提心と意地ばりで嫁入も背ものび〳〵の」………と書出してお夏に既に戀ある事を示せり、然れども背ものび〳〵といふところにて親々の眼には極めて處女らしく見ゆる事を知せたり。淸十郎(即ちお夏の情人)が大坂より戻り來りたる事を次に出して「目と目を合する二人が中、無事お顏見て嬉いと心に心を言せたり」と有處にて更に兩人の情愛の秘密を示せり。

然に清十郎が沓脱に腰をかけて奥の方の嫁入支度を見て、平氣にて「ハア余所には嫁入が有そうな云々」と言ひし時にお夏が「又ねすり言ばつかり、おんなし口で可愛やと云ふ事がならぬか意地のわるい」と言ふ言葉を聞けば、お夏は既に處女にあらずして莫連者か蓮葉者のいたづらあがりの語氣を吐けり。讀んでお夏が「我も室で育ちし故、母方が悪いの、傾城の風があるのとて何處の嫁にも嫌はるゝ、これぞ宜い事幸いと猶女郎の風を似せ」と云ひ出るに至りては、お夏が無邪氣なる意氣地と怜悧なる戀の智慧を見るに足るべし「あの立野の阿呆顔敷銀に目が眩みて、嫁に取ふといやらしい」と云一段に至りては彼の戀愛の一徹にして處女らしきところを蔽ふ能ず。

二人の情通露見したる時に朋輩勘十郎の奸策同時に落ち來りて清十郎が布子一枚にて追拂はるゝ段よりお夏の愛情は一種の神韻を帶び來れり。清十郎の胸の中には戀の因果といふ猛火燃しきりて主從の緣きるゝ神の咎めを浩歎して七苦八苦の地獄に顛墮したるを、お夏の方にては唯だ熾熱せる愛情と堪ゆべからざる同情あるのみ。ひそかに部屋の戸を開きて外に出れば悽惻として情人未だ去らず、泣いて遠國に連よとくどく時に清十郎は親方の情にしがらまれて得應へず、然るを女の狂愛の甚しきに惹かされて遂に其誘惑に從はんと決心するまでに至りし頃中より人の騒ぎ出たるに驚かされて止ぬ。美術の上にて言ふ時はお夏のこの時の底から根からの戀慾は巧に穿ち得たるところなるべし。

清十郎の追拂れたりし時には未だ分別の闇には迷はざりしものを、このお夏の狂愛に魅せられし後の彼は早や氣は轉亂し仕損ふたら浮世は闇跡先見へぬ出來心にて勘十郎と思ひ誤りて他の朋輩なる源十郎を刺殺したるも戀故の闇に迷へばこそ。清十郎既に人を殺して勘十郎の見出すところとなり家の内外に大騒擾となりたる時にお夏は狂亂したり、其狂亂は次ぎの如き靈妙の筆に描出せらる。

あれお夏と呼ぶわいの、おふ〱其所にか、どこにぞ、いや〱いや待て暫し。あれは我家に父の聲我を尋ねて我を呼ぶ、親も懐しや夫も戀しや、父は子をよぶ夜の鶴我は夫よぶ野邊の雉子」又た「下の巻に入りて「宵さこひと云ふ字を金紗で縫はせ」より以下、向ひ通るは清十郎じやないか、笠がよく似た菅笠がよく似た笠が、笠がよく似た菅笠がゑ。笠を案内の物狂

ひの一節」なふ／＼あれなる御僧我殿後かへしてたべ、何處へつれて行く事ぞ男返してたべなふ、いや御僧とは空目かや」の一節、「尋ぬる夫の容形姿は詞に語るとも心ろは筆も及びなき、ぼんじやりとしてきつとして花橘の袖の香に」以下の一節等はいかにもヲフヱリヤが狂ひに狂ひし歌に比べて多く愧ず、「フオースト」のマーガレットが其夫の去りたるあとに心狂はしく歌ひ出でたる「我が心は重し我平和は失せたり」の靈妙なる歌にくらべても左まで劣るべしとは思はれず。」

疑ひもなく「お夏」は巣林子の想中より生み出せる女主人公中にて尤も自然に近きものなり、又た尤も美妙なる靈韻に富るものなり。梅川の如き、小春の如き、お房の如き、小万の如き、皆な是れ或一種の屈曲を經て凝りたる戀にあらざるはなし、男の情を釣りたる上にて釣られたるものにあらざるはなし、或事情と境遇の壓迫に遭て心中するまで深く契たるにあらざるはなし、然に此篇のお夏は主人の娘として下僕に情を寄せ、其情は初に肉情に起たるにせよ後に至て立派なる愛情にうつり果は極て聖神なる戀愛にまで進みぬ。

著者は元よりオフーストの如き哲學的生産の男主人公を作る可き戯曲家にはあらざりし。然れども淸十郎の品格を撿し來れば忠兵衛、平兵衛、治兵衛其他の如き暗迷の資性とは趣きを異にするところ多し、お夏の口にて言はせたる「姿は詞に語るとも心は筆も及びなき」にて既に其高品の心なる事を示し、追ひ拂はれたる後に後悔の言葉または末段の「虚言を云ふまじと毎朝天道氏神を祈りしかども、若き者に悲しさは只今非業に死んとは思ひも寄らず」より以下句々妙味あり述懷に於て其人品の異凡なる事を示せり。左ればお夏が愛情の自から靈韻を含む樣になるも自然の結果にて作者の用意淺しと云ふ可からず。

余は此篇を以て巣林子が戀愛に對する理想の極高なるものと言はんと欲す。世に戀愛なるものの全く描き去るを得て凡て神聖なる宗教的思想の統御に歸する事あらば戀愛のことを談せざるもよし、苟くも戀愛が人生の一大秘鑰たる以上は其素性の高潔なるところより出で其成行の自然に近かるべきは文學上に於て希望せざるを得ざる一大要件あり。

抑も戀愛は凡ての愛情の初めなり、親子の愛より朋友の愛に至まで凡そ愛情の名を荷ふべき者にして戀愛の根基より起

らざるものはなし、進んで上天に達すべき淨愛までもこの戀愛と關聯すること多く人間の運命の主要なる部分までもこの男女の戀愛に因緣すること少なからず。左れば文人の戀愛に對するや須らく嚴肅なる思想を以て其美妙を發揮するを力むべく苟くも卑野なる輕佻なる浮薄なる心情を以て寫描することとなかるべし。

高尙なる意あるものには戀愛の必要特に多し、そは其心に打ち消す可からざる弱性と不滿足と常に宿り居ればなり、戀愛なるものはこの弱性を療じこの不滿足を愈さんが爲に天より賜はりたる至大の恩惠にして男女が互に劣情を縱にする貪獸的慾情とは品異れり。プラトーの言へりし如く戀愛は地下のものにはあらざるなり天上より地下に降りたる神使の如きものなることを記臆せよ。野外に逍遙して芬郁たる花香をかぐときに其花の在るところに至らんと願ふは自然の情なり其花に達する時に之を摘み取りて胸に挿まんとするも亦た自然の情なり、この情は底なき湖の如くに一種の自然界の元素と呼ぶより外はなかるべし、之を打つとも破るべからず、之を鑄るとも形すべからず、之を拔き去らんとするも能くすべからず、宇宙の存すると共に存する一種の靈界の原素にあらずして何ぞや。

戀愛は詩人の一生の重荷なり、之を說明せんが爲に五十年の生涯は不足なり、然れども詩人と名の付きたる人は必らずこの戀愛の幾部分かを解得したるものなり、而して戀愛の本性を審にするは古今の大詩人中にても少數の人能く之を爲せり、美は到底說明し盡くすべからざるものにして戀愛の中に含める美も到底說明し得るまでには到ること能はず、然れども詩人の職は說明にのみ限るにあらずして說明すべからざる者をその儘に寫し出るも亦た詩人の職あれば、詩の神に入りたる詩人の爲すところは說明に力を籠めずして却つて寫實に精を凝らすにありき。

寫實とは云へども世の所謂實際派の爲すごとく人間の獸慾を惟一の目的として描出するの謂にあらず、人間に不完全の認識あるよりして何物かを得て之を贖はんとの慾望は天地間自然の理なれば、此慾望の一轉して他の美妙なる位地に思慕を生ずる實情を描寫するを詩人の本領とは言ふなり。バイロンがうたひし如く、己の冷々たる胸に温熱を生じ己れの頑剛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なる質を和らげて優柔なる性情を與ふるもの即ちこの不完全が多少完全になされし徵なり、これを爲すもの戀愛の妙力にあらずして何ぞ。

ロメオ、アンド、ジユリエットの著者は何が故にロメオが鬱樹叢中に彷徨したりしやを記せず、彼は唯だロメオに自然なる一種の思慕ある事を顯はすに甘んじたり、一種の思慕とは即ち前に言ひし一種の原素なり、彼は此原素を說明せずしてこの原素を實寫したり。ハムレットの著者は明らかに人々をしてハムレットの戀愛に狂へる者なることを言はしめ、其オフエリヤとの問答に就きて之を確かめんとはせしめたり。これもロメオを書きし戀愛に對する極致と趣を一にして唯だ是にては他に大なる不完全不調子の實現を備へたる點に於て異なるのみ。フオーストの著者が其主人公をしてマーガレットに近づかしめ一瞬時に愛情を湧生せしめて從前の不完全なる觀想の大結局を戀愛の中に總べたるなど戀愛の不可拔なる大原素なることを認むるにあらずんば能はざるところとす。

■日本文學史を觀じ來れば戀愛に對する理想余をして痛歎せしむるもの多し。別して巢林子の著作の中に戀愛の戀愛らしきもの甚だ尠なきを悲しまざるを得ず。蓋し其の爰に到らしめしもの諸種の原因あるべし。萬有敎の敎理寂滅の宗敎思想より來れる關係、支那文學史との關係、氣候風土より發生せる色情の惡風其他區々あるべしと思はるれど、兎に角事實として肉情より愛情に入り愛情より戀愛に移ることを記する著作の多きことを疑ふ可からず。生命より希望あり永遠あるの戀愛は到底万有敎國に求むることを得ざるか、そも〳〵いつかは之を得るに至るべきか、我邦文學の爲に杞憂なき能はず。

歌念佛は巢林子の著作中戀愛を自然なる境地に留めて寫實したるもの、上々なる事は余の竊かに自から信ずるところなるが、自然は即ち自然にてあれど何の生命もなく何の希望もなく、其初めは肉情に起し其終りを愛情の埋沒に切りて「よし是も夢の戯れ」と淸十郞に悟らせしめたるを見ては佛敎を恨むより外なきあり。文學の極衰極盛を言ふもの今に之れありと聞く、余は極衰論者に其極衰のいはれを聞かんことを願ひ極盛論者に其極盛の理をきかん事を望む、我邦未來の文學をいかにせばや。

（この論極て不熟なり、編輯期日に迫りて再考の遑あらず、讀者乞ふ之を諒せよ）

右批評長篇に付關原合戰圖志及䖏庵十種の評は次號に讓る。

雜録

天地管見

六合學人

(二)倫理神理の講究

物を明かに觀んと欲せば、先づ其視覺(目)を鋭どくせずんばある可らず。物を鋭どく感ぜんと欲せば、先づ其感覺を敏捷にせずんばある可らず。斯の如く、智慧の事に精はしからんには、先づ其智性を練磨することを第一とす、未だ智性を練磨せずして、古今の哲論を考ふるは、之を背誦するにあらずんば則はち之を誤解するもの也。世人大抵以上の通理を知る、而して倫理、神理に關することに至るときは、惘然として迷ふは何故ぞ。倫理を考ふるものは、先づ其道念を明らかにし、神理を窮むるものは、先づ其信仰を熾んにせずんばある可らず。道念信仰依然元の如くにして、而して、聖人教父の説を批評取捨せんとするは、嗚呼の極みなり。

(三)兒に對する愛

余が兒は其姿愛らしげなり、親の僻目かと思ひて密かに他の評する所ろを聞しに、他も亦た然なりと言へり。果して左らば、余が兒は、其姿眞實に愛らしきなるべし。此に於てか、余は肅然として沈思したり、余が兒を愛するの愛、幾分にても其の姿の愛らしきに由縁することなきか、即はち余が兒を愛するの目的は、其の毀果つべき肉の假初の幻相にはあらぬか。苟くも然りとせば、余が兒片環又は醜貌にして姿愛らしからずば何如に、余が愛は其幾分を減ずべきか。或人の曰く、片環の兒ほど、又馬鹿の兒ほど可愛ゆきもの也と。左れど、此の時の愛なるものは寧ろ憫みにはあらぬか。ラブとピチーとは似て非なり、近く接する隣にてあれど未だ同居せざるもの也。こゝに至りて、余は密かに惑ひぬ、余が愛の質そも〳〵何如にと。余は眞實に兒等が永久の靈性をのみ愛せんことをつとむ。

(四)事業成否鑑識の法

將來に對して計畫し、其事の成否何如あらんかを知らんと欲せば、先づ其決意するに至れる本念の誠否何如んを見るべし。人に憂ひずして天に訴へ、自己を思はずして他を顧み、形骸上の成否を案ぜずして眞知の發達を望み居らば、其事必らずや成らん。己一生中に成らずとも后世に必らず成らん。

時事

○副島伯

兼て此事あらんとは、伯が万一に豫期せし所なるべし、期して而して一身を投入す、國士の義俠と云ふべし。今や老鶴其林に還る、長鳴いよ〳〵淸し。成敗は事の跡にあらず、心の象何如にあり、誠意誠心を以て務を盡し了らば、此れ人間事業の成効にあらずや。

○同胞の出稼人

其人を得ず其道を得ざる移住殖民策は、邦人を外國の奴隷として追出すものなり。愚見殖民論不幸にして當る。同胞須らくニウカレドニヤに於ける日本出稼人虐待の慘狀に耳を傾むくべし。而して政府は此事なしと云ふ、世の新聞紙當に任じて其實況を探らずんばある可らず。

○時事片々

何事の流行ぞ、時事片々の短評切りに見ゆ。無責任の言語を以て、前后左右に冷評し、些の大意見を包まざる唾珠を八方に散亂せしむ。四十二章經に云く、如此き人の罵言は天に向つて唾きするに均し、唾、天に達せずして其面上に落つ。

片々

畜麹子編

○皇后陛下の御指環　此程御新調あらせられたる皇后陛下の御指環は、小石川掃除町の雙龜堂芳蘭（前號にありたる長息の河瀨淸功氏）が多年の工風によりて作りたるものにて、黃金胴に水晶の副輪かけしもの二個なりと云ふ、一見すれば金色表に透きて恰かも琥珀の如く、各々表に徑三分三厘の平圓形を出だし、之に藤と櫻を彫みて櫻の上には、故八田知紀翁が秀詠なる「芳野山霞の奥はしられども見ゆる限は櫻なりけり」の和歌を顯はしたり、其手際如何にも見事なれど甚だ贅澤なるものに非ず、今其價格を計れば二個にて凡二十六七圓なりとは　陛下の御美德誠に恐れ多き限りなり、金剛石入の指環に身代の半を費して已が豪富を誇る似而非紳士諸少しく鑑みて遠慮すべし（讀賣）

●高知女子傳道學會　目下期學試驗中なるが來る十九日閉校式を執行し、而して及第の生徒を各郡へ出派し、實地傳道をせしむる由。

●三重縣の廢娼運動　津市基督教靑年會員は、縣下の淫風の甚だしきを嘆じ、人民の迷夢を覺さんとて、近々廢娼演說會を開くの計畫あり。

●四日市婦人會　は去る廿八日同地基督教講義所に於て、遙拜式を施行し、併て祈禱會を開きて　皇后陛下の御祝福を祈り奉りぬ、同日はレズナ孃を始め會員數十名出席せりと。

●名古屋淸流女學校　は去廿八日　皇后陛下の地久節に當り萬歲を祝し奉り、同校生徒より陛下の盛祭を祝し書を奉れりと云ふ。

●本年の養蠶　養蠶は婦女子が好適の職業にして、此業が女子の事業として、益々隆盛に至らむことを編者是れ祈る、本年は殊の外冷氣にして雨も多ければ、其出來榮へ如何と氣づかひけるが、今全國の概況を聞に先づ平均通常の作柄なりと云ふ。

●群馬縣の小學校　同縣の養蠶に盛なるは人の知る所なり、同縣下の或地方などは當時養蠶時にて小學校は何れも休校せりと聞く。

●加那太の紅裙隊　亞弗利加ダホメーに娘軍あるとは前號に記す所なるが、今回加那太に於ても婦人砲兵隊を編制したり、蓋し此の砲兵隊はクエベツク市のダアンパアー孃の編制せし者にして、同市の少女四百人より成る者なり、されば操練を見むとて集ひ來る人多く、操練觀覽券はなか〳〵に得難しと云ふ（每日新聞）。

●卒業主　高知縣尋常師範學校の公費生にして、來る七月に全科卒業の見込の人員は、五十二名の中女子は十八名なりと云ふ。

●鹿兒島縣下に於ける就學女兒　昨二十四年末、鹿兒島縣下に於ける就學兒童の數六万四千百八十六人の內、男兒五万五千六百八十七人にして、女兒は僅かに八千四百九十八人なりといふ、甚しき相違なるかな。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

我青年何ぞ老ゆるの早きや

文醜眞逸

只だに青年のみ青年々々さ云ふにあらず、記者之を筆端にし、辨士亦た之を口頭にす、曰く明治の青年、曰く新日本の青年、曰く第十九世紀の青年、曰く基督教の青年、曰く何さ、而して今や甚だしいかな、雜誌にも「青年」あり、文學にも青年文學あり、其外青年會さ云ふが如き青年てふ名詞を冠せる集合躰に至つては乃ち天の星の如く濱の沙の如く殆むど指を折つて算ゑ難し、青年青年又青年、アヽ盛なる哉。

然れども注意せよ、今の青年々々さ云ふもの、盡く青年の青年たる分際を辯ゑて之を云ふに非ず、多くは只だ時勢の趨向につれて漫に喋喋饒舌せるのみ、因つて試に問ふ、所謂青年の分際さは果して何ぞや。

蓋し青年は準備の時代にして成業の時代に非ず、蘊蓄の時代にして發揮の時代に非ず、苦學の時代にして安居の時代に非ず、讀書すべくして著述すべからず、觀察批評を以て任ずべし、人より觀察批評さるべからず、之を一年に譬ふれば、青年は夏日成熟の時代にあらず、又冬日休息の時代にも非ずして正に是れ盛春の時代、大ひに發達せざる可らず、之を一日に比らふれば青年は正午多忙の時代に非ず、又た黄昏寂寥の時代にも非ずして正に是れ早朝の時代、極めて長閑ならざるべからず、猶ほ花にて云へば青年は蓓蕾の時代にして盛開の時代に非ず、樹にて云へば嫩芽發生の時代なり、枝葉蓊鬱の時代にあらず、之を要するに青年は一生の春なり、朝なり、蕾なり、芽なりさ云はざるべからず。

故に人その年齒に於ては假令二八なるも將た二九なるも、若し其心事に於て以上の特色を顯はさゞる者は余を以て觀れば既に青年に非ずして老人なり、否な眞の老人にあらずして似而非なる老人なり、之に反してたさひ頭上霜を戴ける老人も其心事に於て以上の特色を帶ぶる者は余輩跪づきて青年の冠冕を其前に捧げん、英の名相グラッドストン氏の肱股、齡中百にして「グランド、ヤングマン」さ綽號されたるジョン、モルレー氏其人の如き、「將に八十三歲の新年を迎へんさする一少年」さ言ひしゼームス、ワットの如き、若くば七旬に近き老齡にてありながら、白き鬢髮を墨に染めて若武者の如く打扮て北國の戰に功名を爲したる齋藤實盛氏の如き即ち是なり。

今は昔し維新前、長州の吉田寅次郎、雄圖を抱いて海外に渡らむさするに先だち、二三の同志を拉へて當時憂國の詩傑星巖先生を訪ふ、先生この青年輩に與ふるに左の一絕を以てす、曰く

悔哉早歲盜虛聲　皓首終無一事成
可奨諸君皆駿足　百千萬里是前程

余此詩を讀むで轉た先生轗軻落々志の就ざるを悲むさ同時に、青年皆駿足、百千萬里是わが前程なるかさ念ふて覺ゑず腕うなり肉躍ふの壯感なくむばあらず。夫れ此の如く老人は青年を推して可レ奨的さなせるに關はらず、前程百千萬里の青年が局促齷齪さして皓首の老成人を學ぶが如きとあらば余輩之を何さか云ふべき、是れ啻だに青年の分際に對して愧づる所ある而已ならず、又た老人に對して相濟まざるなり。

嗚呼當今の青年何ぞ其老ゆるの早きや、勿論今日にても可愛の吾黨青年中には遠大の略、有爲の志を抱ひて他年一日雲蒸龍騰の勢を涵養せる者もあるべけれど、其多數に就いて觀察を下せば「長安少年無遠圖、一生惟羨執金吾」に酷類するもの比々皆然らざる无く、早成夙熟、區々の小康に安んじ、長想せず、遠慮せず、學室さ文庫(ライブラリ)の近衛兵たるを好まずして「ホーム」さ客坐敷の主人公たるを願ふもの是れ豈に今の青年の大弊に非ずや、見るべし、今の時に當り社會の水平線上に浮び出たる青年に、堂乎さして動かすべからざる貫目なくして宛然空瓢の如く、薄綿の如き才物悧巧者の如何に多きかを、是れ何よりの證據にあらずや。

余之を老農に聞く、凡そ地を耕やすに淺き時は、播く所の植物必ず夙く熟して實入らず、之に反して耕やすこと深き時は播く所の植物、其成るや晩しさ雖も然れども肥大なりさ、余ひそかに以て平生學問の心得さなす、嗚呼今の青年、青年の青年たる分際を知らず、修練の淺きを患ゑずして成熟の晩きを患ふ、豈に一分老農の言に對して愧づるとなからんや。

然り而して我青年をして此の如く不幸觀るに忍びざる境界に到らしめし原因必らず无くんばあらず、其原因果して如何。

(一)剛志なき事。　男兒生無所成頭皓白これ眞に惜むべし、而して此の惜むべき境界に陷る所以のもの抑そも何ぞや、多言を要せず、何處までも遣り透ふすてふ剛志鐵心なきが故のみ、志のある所ろ途あり、精神一到何事か成らざらん、古人既に之を云へり、今日の青年が學問經畵何事にまれ大成せずして小成に止まるの原

因大ひに這の徹底的志望の羸弱なるに由らずんばあらず、昔者賴山陽春秋僅かに十二にして立志論一篇を作る、先生の剛志鉄心頗ぶる見るべきものあり、先生後日大業を成すの宿志すでに當時に萌せりと云ふ可し、其文に曰く、

（前略）噫、男兒不レ學則已、學當レ超レ羣矣、古之賢聖豪傑、如二伊傅一、如二周召一者亦一男兒耳、吾雖レ生二于東海千載之下一、生幸爲二男兒一矣、又爲二儒生一矣、安可レ不下奮發立レ志、以答二國恩一、以顯中父母上哉、遇不遇天也、

嗚呼今の時に當り此の如き剛志鐵心を抱ひて上帝と「ヒユマニチー」の爲に全力を注ぐ青年男兒、はたして幾人かある、凡そ薄志なる者に必ず弱行の伴ふべきものとせば、當今老ひ易すき我青年が人生の行路難に處して宛かも疾風に撼かされて翻飜たる海浪の如く脚跟の確定固立せざるは蓋し深く怪むに足らず。

(二)功名にあせる事。　丈夫思ふ所ろ功名にあり、人誰れか功名の心なからん、余は確かに功名心が青年に特有なる性情の一なる可きを信ず、アヂソンが「最も大なる技量を有する男兒は功名心を以て燃やさるゝと最も甚だし」と云ひし語に多少の眞理あるとを知る、藤田東湖が「結髮志功名」と吟じたるとをも能く知れり、然れども今の我青年の如く汲々焉功名をあせり名譽に忙ぐを見ては爲めに大に慷慨せざるを得ず、何んとなれば是れ直ちに我青年を夭殺忙殺するものなればなり、豈に危からずや、抑そも余輩青年は第二の國民に非ずや、社會の繼續者に非ずや、準備の時代に處る者に非ずや、然らば即ち余輩青年の目下に腐心焦思すべき所は如何にせば將來の國民と爲得べきか、如何にせば、將來の社會を繼續し得べきか、前途畢生の事業を擔ふの途如何の大問題是なり、然るに言語同斷、我青年の考へ此處に出でずして徒らに目前の功名に眼を眩まし、一時の聲響に魂を飛ばし、竟に何時の間にやら青年の青年たる分際を忘却して僞老の習にかゝるとは扨も〳〵愍むべきの至りならずや。

(三)父老の樂隱居。　之を譬ふれば青年は猶ほ松柏の若木の如きか、始め微々として見るに足るべきものなしと雖も、既に成長しては突兀天を衝くに至るべき有爲力を蓄へり、此の「ポテンシアリチー」あればこそ古の聖賢も「後世可畏」とは云ひしなれ、其は兎に角、かくの如き大に爲す有の青年をして思ふ樣にノンビリと發達生長せしめざるもの、思ふに芟除し難き蔦蘿の層々纒繞せるが故に非ずや、所謂芟除し難き蔦蘿とは何ぞや、我國舊來の積弊中の隨一なる父老の樂隱居すなはち是なり、乞ふ例を擧げて之を說かむ。

某村に當時廿才前後の男子を持てる極めて頑固一偏の父老あり、嘗て博識の先生に勸められ、三四年間の學資を調達して阿兒を東京の某官立學校に遊學せしむ、烏兎匆々三四年后の曉となり慧敏の阿兒、滯り无く全科を終り卒業證書を懷ろにして、雄心勃々、家鄕に歸れば、家には父老先生、息子の卒業と聞きて忽ち心に謀るらく「豚兒今年廿五才、螢雪學成り錦衣鄕に皈る、榮と云ふべし」彼若し仕進の途に就かば月に三四十金の俸を受くる易々たるのみ、老人余の如きもの何ぞ又た勞するを須ひん、如かす退隱して兒の奉養に餘生を樂しく送らんには」と、此より後は如何あるべきか、余また之を言ふに忍びず、嗚呼氣の毒なるは這の可憐の青年なるかな彼れ雙肩に重大の責任を負擔して前程百千万里を雄歩橫行せむと意氣は矢竹にはやれども、奈何せん、雙脚意の如くに立たず空しく憾みの涙を飲むで小成に泣寢る者これ其末路にあらすや、嗚呼青年の心早く老ひさらんとするも豈其れ得べけんや。

以上は只だ余の親しく目擊せし事情を僅かに寫せしのみ、然るにアヽ何としたることぞ、世上は忌はしき迄に此類の談柄に富めるとは。

(四)社會の注文。　只だに一家の父老のみ早衰すと謂ふ勿れ、一國の先輩先進も隨分早く老耄し給ふを記憶せよ試に諸元老の宣給ふ所に耳を傾けよ、僅かに齡ひ五十路の阪を越ゆれば、乃ち腰を撫して曰く「乃公近ごろ年を取れり」と、いや社會の舞台より退かむと心を決せらる、舞台より退ぞきて何を爲給ふかと問へば花鳥風月を弄むで無聊の閑日月を消す者、大概れ然らざるは无し、玆に於てか鉄乏社會の一面に生ず、供給する者なかるべからず、勢ひ既に此の如くなれば夫の生煮半熟の青書生が其穴處を塡充せむが爲に狂奔するに至るは蓋し自然の成行にして空氣の理、經濟の原則を俟つて后に是を知らざる也。

加之今の日本は泰西文明的の邦土を建設する上より云へば、萬事創業の時代なれは是れ亦た自然、泰西文明的の學問氣風に割合多く養はれたる青年を要すべく、底で夫子自らも青二才であるとを百も二百も合點であり乍ら、餘義なき注文に驅り立てられて身仕度粗忽々々に社會に飛出づ、また斯る社會の常として此の青二才をも珍重尊敬すると一方ならねば青年先生亦た圖に乘して大家を氣取り老成を衒ひ乃公が日本一流の人物なりと高からぬ鼻うごめかすの醜觀を呈するは今日世上滔々たる俗流の情勢にして誠に片腹痛き次第なり、特に今日の處にては此の弊の、文學、宗教の世界に多しと思はる、非か。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(五)文學の餘弊。　近ごろ我國に於ける內外書籍の夥だしき增加は我靑年の心を老廢せしめたる外襲原因の一として見る可し、固より言ふ迄も無く書籍文學の增加は頗ぶる賀すべきとにして(一)百般學藝の知識材料を與ふるを始とし(二)書債をして廉ならしむるの便益あるに相違なしと雖も、之と同時に我靑年をして自修鍛錬の要を忘れて淺薄渉獵の虛學に奔らしめ、結局自家の博識を誇りて俗人の師と爲り糊口の媒助となさしめたるの害、決して少小にあらざるべきを信ず、嗚呼是れ取も直さず我靑年を精神的に老殺するものにあらずして何ぞや、文學の餘弊こゝに至つて極まれりと云ふ可し。

以上叙說したる事の如き旣にすでに先輩諸先生の或は演說に或は雜誌に續々余輩靑年に向つて助言警告せられたる所ろ、余今にして之を曉々す、寧ろ迂腐の譏を免かれずと雖も猶之を言ふ者、我靑年昨今の傾向を察し、區々憤慨已む能はず、胸中一團の丹誠を吐いて、一は以て大に自ら警省し、一は以て聊か我黨靑年諸君の戒心を乞はんと欲する而已、豈に他意あらんや。

前赤壁賦

(和譯)

立花寬篤

ことし文月の望の夜とりおのれ友どちと小船に棹さして赤壁わたりに遊ぶ冷風徐ろに通ひくるものから波立つ程にもあらず杯をあげてともびとにすゝめ明月のから歌、歌ひなどする程に月東の山の端を離れてやう〳〵二星のあはひをめぐるめり、いと白うおける露のけしき空につゞける水のさまえもいはずなかし小船の行がまに〳〵限も知らぬ江をわたるに雲を踏み風に乗りて止まる所を知らざらんが如くはた、此世も忘れ果てゝ天の空にやのぼらんが如し斯くて酒酣かはし打興ずること極りなし樂しさの餘りに舷を叩きて歌ふ其歌

久方の天の川にや船こがん
名もかつらてふ川瀨のぼりて

かく歌ふに一人のともびと笛をとりいでゝ歌にあはせて吹きすさぶ其音怨むが如く慕ふが如くなくが如くうたふが如くのこりの音いとかすかに絕えなんとして絕えざること糸すぢの如しまるるはおく山のみ谷に潛める蛟も立舞ひたなゝし小船のやもめも哀を催さんかし」おのれ、きと、かたちを改め坐を正しうしてともびとに問ひけらくなどしも然るかといへばともびとの曰く月は明かに星は稀に烏は散りて南に飛ぶときこゆるは曹孟德がから歌に非ずや西に夏口東に武昌を見渡せば山川の有樣よのつれならずこは孟德の周郞に困しめられし所なめりかの人一とせ荊州を破り江陵を下り流につれて東の方に行きしときよ船もて水をかくし旗もて空をさへぎり酒を釃みて江に臨み槊を横へてから歌歌ひけん是や信に類ひ少なきますらをにぞありける然はあれど今はやいづこにかある今あれとそことと山水に起きふしうちくづを友とし小男鹿に立まじらひ小船に棹さし酒酌みかはして樂むも靑海原の拾小船、いつよぞありと賴むべきひをむしの己が命をはかなみ此の長き江の盡きざるを羨むになんあるゝいで空飛ぶひとりを伴ひてあくまで遊びありき月を抱きて命長くあらんといふおのれいはくそこは彼の水といふものと月といふものを知れりや逝く水はかはれども往きつくすことなし みちかくる月はかくれどもつひに形大さをかふることなしおもふに物皆かはると見れば天地はた時の間も變らざることなくかはらずと見れば物も我も皆盡くることなし世は只悟るべし物うらやみはすまじきものになんかつやおもふに天地のあはひにありとあらゆるもの其ぬしあらざるはなしかれ吾がものにしあらぬ限りは塵一つだにえ取らじ只江の上の風と山あひの月のみは耳に喜び目に樂しみ取れ共止むるものなく用ふれども盡きずこは天つみ神の無盡藏なり是ぞ吾とそことほしきまゝにすべかめるといふにともびといたくよろこびまた更に杯を擧げつかくてやう〳〵肴も盡き杯盤こゝかしこに亂れまじりて皆醉しれてふしたふれともに小船の中に眠りてしのゝめの空の近づくをも知らざりけり

教育學

嚴本善治(未定稿)

小引

(一) 此教育學は明治女學校高等科生に對して講述せるものゝ大意を筆記したる也。故に、其普通科に於て、一週二時、一年間講述したる普通教育學は、此が前篇となるものにて、彼にて説きたるは、此にて略したるものと知るべし。

(二) 此講義は、未だ世に廣く示す可き程の物にあらず、故に未定稿としてたゞ知人知友に配付し、其批評を請はんとを旨となし、最初ミミヲグラフにて第一冊を印刷したるに、文字の鮮明ならざる憾みあり、且つ之を一讀するの榮を賜わらんと申込み、活版に附するとを勸告せらるゝ君子多きにより、此回より更めて本誌の附錄となす。

(三) 毎月第二回の白表女學雜誌に附錄とし、一回四頁とす。故に前のミミヲグラフにて印刷せしものより字數を多くするとを得。前預約者に對し必らずしも負かずと自信す。

明治二十五年六月

第一章

教育とは何ぞや

(一段) 學解

(一) 教育とは何如なる事ぞ、又教育の目的とする所は何事ぞと云ふに、古來様々の説あり。左に其重なるものを列擧せんとす

一、プラトウ云く、善き教育とは心と靈とに其の當に得べき總ての美と總ての完全さを得せしむるもの也。

二、モンテイン曰く、教育は、人を造るものなり、特別の人(スペシアリスト)を造るものにあらず、故に啻に言語文章を多く學ばしむるとも効なし、其靈魂をより好き調子になし、其判斷をより好く固定せしめずんば、學生をして寧ろ(テニス)の遊びに日を消せしむるに如かず。

三、フレーベル曰く、万物の運命は、其中に存する神の性を發露するにあり、故に教育は、人の心の中に、存する神の法を現はすにあり、人の中の神を顯はすにあり。

四、スタイン曰く、教育は人の心に基つきたる法方によりて。人の諸の力を調和好く、且つ公平に開發するにあり。即ち偏僻したる局部的の教育を避け人の力並に價値の存する諸の動機(モーチーブ)を悉く動かし、悉とく養成するにあり。

五、ルツソウ曰く、自然の造り主の手にて造られたる儘のものは、万物善ならずと云ふことなし、人の手を之に加ふるによりて墜落す、故に教育とは、自然のまゝに、人を發達せしむるにあり。

六、ビシヨツプ、ザウメンロープ云く、教育は人の諸の腦力を耕やし、動かし、伸し、强よくし、遂に之を磨くにあり。

七、ミスハミルトン曰く、教育に關する所の論者の説を聞けば、教育は地位高き者、又は富ある者のみに大切なるが如し、然とも、余の言ふ所の教育は然らず、教育は總て人類に善く通する諸の能力を錬調するとを目的とすべき者なり。

八、ウイリアム、ペーン曰く、教育は人をして夫々の地位に相應する義務を盡すものとならしむことを目的とす。故に理想の教育は、人の心と躰とを十分に發達せしめ、之に總ての智識を、自由に與へ、且つ此の知識を久しく所有せしむるやうに教ふるにあり。

(二) 以上八の說は、大抵完全なる人を造ると又は、人の能力を完全に發達せしむるとを以て教育の目的となすものゝ如し。

九、セヂカ曰く、學問は、學校の爲めに爲すものにあらず、人生の爲めに爲すものなり。

十、ロック曰く、教育は人をして實用の藝能を得せしめ實際の用に適するものとならしむるもの也。

十一、ラ、シャロテース曰く、教育は尤も普通なる尤も尋常なる、事務に適するやう、子弟を教育し、人生に處する品行、及文明社會の基礎となるべきものを享受せしむるにあり。

十二、ローリン曰く、國家人民の幸福何如んは、少年を教育するとせざるとに關す、故に教育は、少年をして、その天職を蒙むりたる夫々の職業に適するの價値あらしむるとを目的とす。

十三、レーナン曰く、教育は、人の夫々の地位相應の益を爲すとを教ゆるにあり。

十四、ベーコン曰く、教ゆる所のものに由りて、樣々の効能を爲す、喩へば、教育は藥の如し、其科目次第にて、人の性質を矯め直し之を良くす。

十五、ゼームス、ミル曰く、教育の目的は、人をして出來べき丈け、先つ自己の爲に幸福となり次に他人の爲に幸福となるやうにならしむるにあり。

(三) 以上七の說は、人を夫々の目的に相應するやう、教育せんとするにあり。即はち、人を人たらしむと云はんより、人を或る事務に適するものと爲さんと云ふものゝ如し。

十六、マセウ、アーノルド曰く、教育の目的は、人をして自ら己を知り、且つ世界を知るに至るを目的とす。

十七、ニコール云く、教育の目的は人の智慧を、達し得べき尤遙かなる點に、達せしむるとを目的とす。

十八、ベイン曰く、教育は人をして能力を得せしめ、之れを十分に得有せしむるとを要とし、而して何如なる能力を得せしむべきかは、教育學の研究する所ろに隨ふ。

(四) 以上三の說は智識を得せしむるとを目的とす。

(五) 要するに、教育を單に智識を得るものとのみ、解するは穩當ならず。且つ其何如なる智識なるやを辨せずば、未だ教育の眞性質を知る能はず。又た、世上の事務に適せしむるとを教育の目的とする時は、未だ充分なるを得す、何んとなれば、人はただ此人世にのみ、生存するものにあらざればなり。又完全の人を造ると云ふは、頗ぶる廣く且つ高尚なる解釋なりと云へども、何如なる人を以て完全となすかの解なくんば、未だ之を瞭解すると能はず。

(二段) 人物の理想

(一) 人を完全に發達せしむべしと云ふ、然れども完全なる人は抑も何如なる人ぞ、其の理想に種々あり。

(二) 即はち羅馬人は勇にして國を愛し、疲勞に堪へ教練を受け易き猛者多からんとを理想し、スパルタ人は身躰を健にし武藝に達し、角力戰爭に勝利を執るべき人たらんとを理想し、アテンス人は道德上の完備と肉躰上の完備とに恰も好く調和結合したるものとならんとを理想し、ヘブリウ人は利未記に汝等聖なるべし、そは汝等の神たる主なる我聖なれば也とある教に從ひ、有德清淨ならんとを理想し、印度人は動物的の猾智を有し身躰能く堪へ苦難を嘲ける程の力あるものを完全の人としたり。

(三) 我國に於ても亦年代に隨ひ完全人物の理想を異にしたり。神代並に神武以后漢學流行以前の頃は人は只だ勇猛ならんとを希ひ、漢學流行以后佛教大に行はるゝに至る迄は人は幾分か儒教の教旨を理想とし、藤原氏時代には、歌を詠み、文に妙ならんとを事一とし、源平以后足利時代に至る迄は佛教の理想を第一とし、其后戰國時代にありては勇將たらんとを望み、德川氏に至りて大に漢學の感化を蒙りて、忠孝の人とならんとを願ひ、維新以后方今滔々たる世の人は、立身出世の榮華を理想となす。

(四) 故に教育の風國によりて異なるなり。羅馬人及びスパルタ人は、躰操、擊劔乘馬、攻戰の術を學ぶとを要とし、印度人は、其子供にすら斷食難行の務を爲さしめ、ヘブリウ人は、モーゼ、アブラハムを理想として、神を畏れ心を潔よくするとを學び、アテンス人は演說、討話、修辭、學問を專要としたり。

(三段) 社會と教育

(一) 通常、人は生れざる前に社會あり、生れ出づるや既に社會の影響を蒙らざるとを得ず稍や、長して其社會の教化を受けざるを得ず、既に成人して其社會の爲に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

働らくとき其社會に適應せざるヿなし。左れは何如なる人も當時の社會によりて多少感化され教化さるゝものなり。フヒリツプ、シヤツフ曰く信仰の父アブラハム。猶太の律法者モーゼ。預言者中のエリア。使徒中のパウロ、ヨハネ。希臘人中ノアサナシアス、及クリソストム、羅甸聖父中のアウガステン、及ジエローム。スクールメンの中のアンセルム、及トマス、アクイナス。法王の中のレヲ一世及びグレゴリー七世。新教改革者のルーテル及カルビン。古代哲學者中の師父ソクラテス。詩人の中のホーマー、ダンテ、シエクスピヤ、ミルトン、ゲーテー、シルレル。繪畫人の中のラフハイロ。日耳曼皇帝中の最初最大なるシヤーレマン。軍將の中に高く塔立するナポレヲン。米國大統領中の最初最賢最良なる大統領にて而も米人の氣質の尤純粹、尤高尙なる雛形たるワシントンの如き諸の偉人は當時全世界の人類に率先し之を誘導したるヒーローなり。然れども彼輩皆格段なる人類及時代の臭氣を存し一般世人と同樣の誤謬妄想を脫する能はず。蓋し何如なる偉人と雖どもその當代の影響を蒙らざるものあるなし。

(二)故に教育の情態は社會の形勢如何に隨て變化し又人が受んヿを欲する理想上の教育も亦社會の事情何如に隨て變化すべし之を以て教育の性質目的方法等は社會の有樣何如に隨て變化すと云ふべし。

(三)人は社會の爲に生るゝか將た社會は人の爲に存する乎、言を換ゆれば國家は人の爲に存する乎將た人は國家の爲に存する乎、此事一大問題たり。然れども苟くも基督教を信ずるものにて、近世新議論の趣勢を知るものは人を中心にして國家を之に副ゆるものとなすなるべし。

(四)人社會に生れて多少社會の感化を蒙むるは止むことを得ず亦之れに相應するの教育を受るも亦止がたきこと也然れども實は人其完人となりて以て社會を完くするヿを得せしめずんばある可らず。即はち人先つ動きて社會を變動改革するの原動力とならざる可らず此故に教育の制度を會社の事情に相應せしむると共に亦教育の制度を以て社會を改造するヿを期圖せざる可らず。

(四段) 個人と社會

(一)人社會の中に生れ出て其養を受けて成長す、勢ほひ社會の情態に相應せざるを得ず。然れども社會の情態は一個人の集勢より成れる者なるが故に一個人先づ改まるときは社會も亦隨て改まらざるヿなし、一個人を社會の中に投沒し了するヿある可らず。

(二)滔々たる社會の大勢は之を改むるヿを容易ならずと云ふものあり、蓋し容易ならず。然れども爲し難きにはあらざるなり、賴襄曰人勢に違ふヿ能はずして而して勢亦或由レ人而成、是勢也不三肯爲二之謀一不レ知レ勢者也と。エメルソン又曰くヒーロイズムは人類惣躰の聲に逆つて運動す時には偉大なる者善良なるもの聲にも亦逆つて運動す、ヒーロイズムは平和を欲せずして戰ふものなり一個人の品德より起る秘密なる刺激に從ふものなりと。ギゾー曰く。一個の人億兆の衆に對するその數に於ては億兆の一なり、然れども胸中閃々たる一道の天の火は遂に全世界を燒盡すことあり。心より流れ出づる細々たる一流の泉は遂に天下に漲ぎるヿあり。少數人が頭腦心臟中に起りたる僅少の變化は、心理學者之れを筋肉の動作なりと云ひ、生理學者之を血液の巡環なりと云ふのみ左れど其僅少なる變化は至大至廣の影響を全世界に及ぼすなり。基督の事は言ヿを待ず、支那、西洋、日本數千年の思想界に於ける孔子、アリストートル、釋迦等が感化の何如に廣大なりしかを思ふべし。

(三)故に一個人の靈を擧て社會の風波の裏に投し其大勢の趣くまゝに任ぜんよりその一個人の新思想を用て社會大勢の運動を一廻轉すべし。ライプニッツは曰く、吾に數年間教育の方向を與へよ左らば余は全世界を一新すべしと、之れ、人の新思想を用ひて能く社會の大勢を一轉すべきヿを信ずる言なり。ペスタロッヂは曰く余は歐洲進歩の車を一廻轉せしめたり、その方向を一新路に向け變へしめたりと、此は即はち新思想を用ひて現に社會の大勢を一轉したるヿを自證するの言なり。

(四)左らば社會が能く一個人に感化すると均しく、一個人亦た社會を感化す、而して此の不完全なる社會の感化に任するときは、人を不完全に發達せしむるヿなるが故に、人を先づ圓滿に發達せしめ而して社會を感化するを必要とす。人の圓滿に發達せんヿを希望するは即はち教育學の理想なり。

(五)完全なる人とは何如なるものぞ、その理想も亦た社會の感化を蒙むりたるによりて古今各國相違ふ所のものあり、然れども人は能く社會現今の情態以上に超出し、社會の需要に屈托せずしてその完全と思考する所ろの理想を造るヿを得るもの也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（五段）　完全人物

(一)吾人が所云る完全なる人物とは基督の如き人即はち是れ也、フヒリップ、シャッフは、基督人性論中に古今歴史上の數多の偉人を列擧し其の欠所誤謬を摘指して終に曰く諸の偉人皆如此く或時限及び、或人種の誤謬妄想を存し其品徳は只一部分の人情を有して、決して普通全般に渉るの人情を有せず。基督に至ては則はち然らず、彼はペテロの如く剛烈ならず。ポーロの如く、多情ならず。ヨハ子の如く憂鬱ならず。ヤコブが時として在りしが如く冷鈍ならず。彼は輕率又は剛烈の弊なき快濶と、亂暴又は多情の失なき勇氣と、嚴酷と、憂鬱との弊なき嚴肅と、冷鈍にして淡きにあらざるの靜肅とを兼併せたり、其熱心は嘗て情に流れず、その執着は嘗て頑固に陷らず、その仁惠は嘗て柔弱に失せず、その優情は嘗て過感に走らず、超然として世に關せずと雖も之が爲に世の事に無頓着、無關係となることなく、尊威ありといへども不相當に誇り又は過信することなく、能く語ると云へども不相當に親しむことなく、身を忘ると云へども窮屈なることなく、禮節ありと雖嚴酷ならず、子供の如き無我と大丈夫の勇とを合せ、神に万事を獻さぐるの熱心と人の幸福を撓みなく望むの念ひを兼れ、罪人に對する優さしき愛と罪に對する和だめ難き嚴重とを備へ、人を畏服せしむるに足る尊威と、心を溶くが如き謙遜と憚るゝことなき勇猛と細心と用意と屈せざる豪毅と、淳々たる優愛とを兩つ乍ら有したり之によりて基督が尋常の人にあらざることを知れりと。

(二)基督の美なる德性は何如に基督教に反對する所の人と雖も倘之を承認せざるを得ず、ウーン、ヴヲヤク、ルッソウハ、十八世記に於ける佛國不信徒の巨魁なるが倘ほ其「エミール」の中に基督とソクラ、テストを比較するに至りては兩者の相隔離すると喩へば聖人と神との如しと云ひ彼の有名の語を發して曰く、若しソクラテスを、哲學者として死せりと云はゞ基督は即はち能く神の如くにして死せるなりと。ナポレヲン第一世冷然として宗教を度外に置くと雖も、其炯眼に映する所ろ遂に基督は人以上の人たることを認ためざることを得ず、セントヘレナの孤島に在りて最后に人世を觀し黯然たるときに云く、基督教の道はアルゼブラの如く明白なり、基督は、シーザー、アレキザンダー其他世の英雄偉人の比にあらずと。ゲーテは詩人中の先達なりと雖も着想人世に滿足し自から安んじて高潔ならざるものあり、然れども其の基督を見るときは之を神の人（デバイン、マン）又は神聖の人として人類の模範模型と爲すべきことを主張せざるを得ざりき。日耳曼傑文家の大斗ジーン、パウル、リヒテルも、ナザレのエスに對するときは其の滑稽諷刺の語調を變へて、彼は偉大なる人の中の尤も純粹なるもの、純粹なる人の中の尤も偉大なるものにてその釘打したる掌を擧て國を其礎より高め、歴史の潮流をその古き流れより轉じて今日に至るも倘ほ万代を支配し啓導することを減ぜずと言はざるを得ず。英國の未信徒にして英雄崇拜者たるトマスカーライルは、古今歴史上のヒーロイズムに基督に比ぶものを發見すること能はず基督の傳記は完全なる理想の詩の如しと云ひ基督の人と爲りは總ての英雄の最大なるものなりと云ひその德を想思ふときは其何如なる人なるやを定め評すること能はず、只だ此靜默なる者を沈思して神聖に沈思するのみなりと云へり。聖經を酷評し、奇蹟を悉く追放したる、エルネスト、レーナンも、基督を稱して巨大なる面積の人物、比類し難き人、之に對して一般世人の衷心賛美して神と云へる稱號を呈したる人、宗教に比類なき進歩を與へたることを過し世の万人にも亦恐らくは后に來るべき何人にも優り恰も好く神の子たるの名目に適するの人なりとせざることを得ず、遂に其基督傳の終末に來りて云ふ、今后の未來に何如なることを驚歎するとも、その驚歎は必ずや、エスに對するの驚歎に超ゆべくもあらず、之を崇拜する者は止むことなくして彌よ増す可し、その傳記に落す涙は限なく流るべし、その負いたる苦痛は尤高倘なる人の心を常に溶き、万づ代に至るまで人の生みたる子の中、嘗て、エスよりも大なる者あらずと宣言することなるべしと。

(三)近頃ろ一書を著したる人基督を論じ基督は其智慧に於て倘足らざる所ろあり、故に完全にあらずと云ふものあり、然れども何によりて基督の智の慧の足らざりしを證するやを知らず、且つ智慧の最后は靈の智慧なり哲學上學術上の智慧は靈智を得るの方便に過ぎず此方便に拘っろいて基督を評するに至ては殆んど聖を見るの眼なきものなり。

(四)或は基督を男性なりとし之を一方に偏するものとしてその完全なる人の理想たることを疑ふものあらん然れども基督は實に男女の兩性を現はし男たり女たりと云はんよりも寧ろ人たるの性を十分に發揮したり、余は基督を思ふ毎に其必らずや男性たることを確認する能わず之を見てたゞ人となすの感多し而して其教ゆる所を聞けば孔子釋迦モハメットの如く男女の間に差別を置くこともなく男女を人間として同く說話す而して男女ともに之を標準と爲すことを得るなり。

(五)基督は即はち完全なる人物の理想なり而して其の品德を分ちて、三つと爲す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

牧畜雜誌

第八十二號目次
六月十日發刊
毎月十日 廿五日 二回發行

○論説

○我邦牧畜業の前途如何　獸醫學士 佐藤清明

○耕牧の關係に就て　獸醫學士 池田音次郎

○雜錄

○リンコルン種羊の圖解○仔豚の手飼○種家の色澤優劣○乳汁の防腐簡便法○雄鷄に配する雌鷄の數○孵卵器は特に夏季に効あり○豬布病の治法○鴿の孵卵及其雛○牧羊實驗談○生牛皮輸入增減比較○宮崎縣の屠獸數○軍馬購買○舊藩々の牛馬政(承前)○岩手縣獸醫學校景况一斑○家畜品評會開設の計書○馬匹賣捌所

○統計

○畜産物數量及價格

○講話

○暹羅鷄飼養小言(承前)　東京 大賀宗祿稿

○牧羊の栞(承前)　山陰牧翁稿

○寄書

○屠畜法　加納正治

○南洋の嶋廻(其二)　藤井米八郎

○問答

○孵化用卵に就き質問の答○牛舍の件に付質問の答○乳牛の件に付質問

○廣告

發行所　東京日本橋區呉服町三十二番地　牧畜雜誌社

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵税四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶なり。

發兌元　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生著
增補訂正第二版

皇后宮御觀

はゝのつとめ

親の卷 妊婦産婦の心得 定價金三十錢(郵税二錢)　子の卷 日本育兒法 定價金四十五錢(郵税四錢)

右は我國無双との好評を博したる日本母子衛生書なり先般增補訂正の上再版したり醫科大學産科婦人科小兒科病室幷に群馬縣高等小學其他諸女學校に於て參考書又は用書として使用するところ少からず

書肆　通三丁目 丸善。表神保町 中西屋。馬喰町 島利。春木町 島利支店。通鹽町 中央堂。

東京麹町區下六番町　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世外雜誌

佛教

毎月二回定期發行

毎號紙數五十頁以上
一部の代金五錢五厘
十二部前金は六十錢
廿四部前金壹圓八錢

本會の雜誌「佛教」は專ら學佛者の爲めに發行する特殊なる雜誌にして宗派又は團躰の機關にあらず「佛教」は佛教普通の教理を說明し及ひ佛教と政治文學其他社會人事との關係を論述するを本色とす「佛教」は遙に俗界を脫せし雜誌なれば讀者をして毎月二回塵俗の外に逍遙せしめ心理の垢を洗除す「佛教」は其誌面を以下の各欄に分つ

教義 教門碩德の教誡垂示を掲く **論說** 朝野名士の高論卓說を掲く **講話** 高僧名士の講義及法話 **雜記** 學佛者の參考になるべき諸般の記事 **新聞** 世間百般の時事に付き世外に立て公正に評論す○其他斬新擢抜なる法螺文苑、寄書及高尚優美なる小說を掲く

「佛教」は定價の外郵税不要○見本は郵劵六錢

發行所 東京淺草吉野町 **佛教學會**

慈雲和上

十善法語

洋製美版合本全一冊定價五十錢

特別減價金二十五錢 郵税八錢

右は葛城慈雲尊者著述の有名なる法語なり、從前の版本既に世に盡きたり今般誤字を訂正し大字明朝を用て再版せしものなり、美版にして廉價

鳥尾得庵居士序文及肖像略傳付

慈雲和上法語集

用紙善良印刷鮮麗正價廿五錢郵税四錢

特別減價十八錢 郵税四錢

右は十善法語を除くの外、尊者の法語數多を輯錄したる者也、十善法語は世既に之を知る、其他の法語は人知るもの尠し是れ特に本書の出版ある所以なり、印刷製本の美なると無比

釋雲照和上序文及略傳付

行誡和上法語集

用紙印刷及ひ正價共同上
特別減價十八錢
郵税四錢

右は世に釋門の泰斗と仰かれたる行誡和上の法語を輯錄したるものゝ、其語皆な學佛者の指計、末世の惠燈之

發賣所 東京市淺草區吉野町 **佛教學會**

黨報

毎月二回 十日 廿五日

第十四號目次 （六月十日發行）

○黨論 ◉新陳代謝論……板垣退助
○論說 ◉人心の倦怠…議會の解散……江口三省 ◉暗殺論……野口勝一 ◉長嘆大息論……我佛子 ◉吾人の希望……畑下熊野 ◉恐怖、危懼……松田吉三郎
○黨報 ◉代議士總會◉前代議士◉感謝狀◉運動費の義捐◉山陰團躰組織會及演說會
○漫言 ◉保護色……皆無庵
○帝國議會 ◉衆議院◉貴族院
○時事 ◉副島伯◉後任◉愛岐救災事後承認◉鐵道買入法案◉新聞紙法案◉政府の秘訣◉松方首相の演說◉海軍大臣◉湖南事件◉法典問題◉司法大臣の憲法論◉三大臣◉蒼海伯◉武斷の勢力◉海軍省の不整理◉昔はものを思はさりけり◉地價修正◉鳥尾子◉岐阜縣知事◉狐狸◉咄々怪報◉强硬派◉傲と軟◉惡德橫領◉欺負の徒◉中央交渉部◉議員◉末路◉不安條例◉保安條例◉支那人排斥◉淸國公使◉議會閉會後◉民吏兩軍一覽表◉時事日記

發行所 東京芝公園 **自由黨々報局**

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

教育學、女學の附錄廣告

小生が、明治女學校高等科女生に口授したる講義の中、左の二書に錄したるものは、些さか大方の是正を請度ものあり、且つ地方に在る女生にして其の筆記を見たしと要むるものもあれば、聊に簡易出版を用ひ、第一號を出版せし所印刷不熟練のため殊の外不鮮明に有之、依て本號より左の法により附錄として出版致すべし。

巖本善治

○講義錄

教育學 每月第二甲の卷女學雜誌へ六號詰四頁の附錄として出版す、憾らくは世上の意見を異にする君子の是評を請むとす

女學 每月第二乙の卷女學雜誌へ六號詰四頁の附錄とす、是れ年來一科の學を講するの必要を感じ一二の痛駁あるに抱らず尙之を講述す

女學生 廿五號

○○○○來る廿一日早朝に發兌す

一冊價四錢郵稅五厘

社說には**東坡、人と吟ず**より筆を起して**嘔吐的青年**に至て、烈々慷慨の憤氣極まると甚し「吾が園」には八丈島探見に係る最も珍らしき**爲朝の古跡と八丈嶋婦人**とを掲げ、「漫筆」には閑寂にして世味深き**終焉の辭**さ、最も情迫り感湧きて一種嚴肅の涙深き**亡母を想ふ**の麗筆を掲げ、「理科の話」には當季最も研究すべき**梅雨の話**あり、「文欄」には高等女學生の手に成れる**各女學校の文**を集め、「博物の園」には某學士の手に成れる面白き**奇なる蜘蛛**の說明さ**化物花**の實際的の作り話しあり「時の感」には**花圃、若松、小金井三女史**の簡潔にして穿てる短評さ**女子教育、會堂**の感を掲げ、「昔話」には**惟然坊みな俳諧、一年の雨**等最も愉快なる突談を掲げぬ、此他「詩歌の卷」には古人秀絕の**名歌秀句**を一種の眼光にて想深きものを集錄して、「學びの栞」には**唐詩選講義**を掲げたり

女學雜誌社

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ

定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何なか中正の旨義さ云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の胥論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女體さ躰操……百

上躰操……百
下女體……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版

林學士 星野愼之輔君著

昆蟲植物金石

採集法

小形洋綴美本

正價金八錢

郵稅金二錢

目錄

昆虫分類
昆虫變態
採集地
採集注意
採集器
貯蟲器
刺針法
昆蟲運搬法
幼蟲類飼養法
葉さは何

花さは何
枝さは何
植物
及樹木種名
採集すべき部分
採集氣節
採集器具
乾腊法
標本製法
金石分類名稱

金石の現出
識別鑑定法
岩石分類名稱
土性分析法
採集器具
採集方法
地質觀測法及び器具

木の間青み繁く蝶は野邊に舞ふ今や採集の期となりぬ請ふ一本を坐右に備へ給へよ。

發賣元

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

イヨー…………別品の玉そろいダワイ

玉掌露（ぎよくしやうろ）

一名玉のはだ　大瓶金拾錢　小瓶金六錢

○抑この玉掌露は玉の如く透明にして中に香氣を含み皮膚を潤し艶を生ずる効能あ
る故に人々常に此露を手掌にたらし面部其外にぬ
りつくれば○のぼせることとなし○はだあれず○日
にやけることとなし○きめこまやかになり白粉のな
じみよく○にきび○そばかす○あせも○づさう其
外總て悪きふきでものせず○しみを生ずることな
く又寒氣風あらき時は此露を常より多く用ふれば
水づかひするとも○ひゞきれず○しもやけせず四
季ともに皮膚の艶美をたもつこと誠に無類佳品に
して實に掌中の寶玉と云ふべし殊に三能しやぼん
お遣の跡にてお用あれば尤も効能多し

笠原堂謹製　壹個金壹錢五厘

此玉子ぬかは御婦人方つねに御用ひのぬかへ
藥を加へ玉子にてねりたるものにて御用ひの
節はゆにても水にてもしめし手のひらにすり
おとし其手にて程よくはだにすりこみ手ぬぐ
ひにてあらひ給ふべしおしろいのゝる事妙な
り但しおつかひのあとは紅糸の所をかけざほ
又は柱へかけおきいくたびもおつかひなされ
べし此玉にぬか一ッにて十日位ひお用ひ相成
候御徳用第一のぬかなり

きめこまかになる

懐中良藥

たまかつら

一名上等づゝう　紙製 一錢五厘　布製 二錢

主治○づゝう○はのいたみ○うちみ○きりきず○ひゞしもや
け○やけど○りようまちす○其外諸々の痛所等によし殊に阿
娘の頭痛に脳める津液を以て痛所へ用ゆれば即効を顯し暗に

清香を發し宛も桃花の朝に露を賎き牡丹の夕に雨を過せるか如く自ら美人の粧を
作す實に奇製の良藥也願は四方の諸彦御愛求あらんことを

○元祖色白くなる三能しやぼん　壹個金拾錢
髪のこやし毛のはへる香油　一名美人かつら　大瓶卅錢中瓶廿錢小瓶十錢
日本一おしろいいらず白妙　一名小町のつや　大瓶廿錢　小瓶十錢

東京銀座壹丁目つやふきん本家
電話番號四百七十二

發賣元　佐々木玄兵衛

特約 大勉強 賣捌

下谷池の端仲町實丹本舗守田治兵衛○車坂町さくら香本家堺屋重兵衛○淺草駒形
町おなじみ小間物店中島百助○兩國廣小路米澤町五臓圓本舗大木口哲○村松町實
丹水本舗岩涙長造○元大坂町清婦湯本舗高木與兵衛○日本橋瀬戸物町玉のつや本
舗玉置金八○馬喰町一丁目小町水本鋪平尾贅平○十軒店本石町藥舗森谷萬次郎○
四ッ谷傳馬町小物店山形屋定次郎○芝神明鳥居前藥舗岩本新兵衛○新幸町花いか
だ柳屋○麹町三番町藥舗雨宮○牛込毘沙門前藥舗尾澤○麻布永坂町藥舗堀井

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

高尙有益なる青年教育雜誌

後進

每月二回 一日 十五日

一部六錢 十部五十五錢 郵劵代用一割增 郵稅不用

●●第五號（六月十五日）發兌

●●第壹號再版出來

目次●後進○敎育家と學術家●論說○士氣振興策（小林生）○近江商人（羽生氏）●寄書○精神的敎育（根本哲之助）●雜錄○國史談（櫻庭乾外）○菜根譚抄（澤雷生）○老偉人グラッドストン（對馬生）○時鳥の初音●文苑○經世論策序（矢野龍溪）○西明寺時頼百首抄に和して（紫あせたり主人）○鳴立澤碑（三千風）……其他評林雜報ともに皆万丈の氣あり

●後進は帝國青年雜誌中の最大なる好雜誌なり若しこれを疑はゞ左の公評に問へ

●日本…先達の士後進を待て頗はるべく後進の士先達の士によりて成すべし若し有爲なる後進の徒多からすんば先達の事業もたた好果を收むる能はさるのみ「後進」の抱負や大、識見や邁、行文欝勃進修怠らすんは其造詣する所を知るべし「後進」夫れ努力せよや

●報知新聞…號して「後進」と云ふ特勝なる名字なる哉思ふに先進の業を承成するものは後進なり今や先進の士漸く老んとす後進の國士奮起するの秋なり此志望を抱負して生るゝものをこの雜誌となす壯なる哉自愛せよ

●東京經濟雜誌…開卷第一に記して曰く今や青年雜誌其數に乏しからさるも多くは是れ巧みに浮華の文を草し妙に華麗の繪畵を挿み以て一時の快樂を專らにするに過きす能く血淚の文と爲り血淚の筆と爲り至誠以て其志を養ひ其氣を鼓するものあるなし「後進」是に於て乎起り誓て此弊を除くと「後進」の抱負大なりと云ふべし

發行所 國士館

東京小石川區同心町廿七番

大賣捌●大倉書店●東京堂●東海堂●巖々堂

不要保證金 不徒豫約期

日本大辭書 山

體裁 大本 横六寸竪八寸 一頁一百（…）同字數二千 一百 一冊平均二百頁 全部一千二百頁 二万六千行

全六冊ニ外ニ附錄一冊 頁數百廿頁 語數全六冊分七

萬言（大槻氏ノ言海ハ全三万九千餘言）釋義ノ各特殊ニアル物十六萬

言。引用出典及證例二萬一千種。

（一）第一冊ノ發兌期ハ本年七月十一日、第二冊ニ限リ八月廿日以後每月十一日發兌十二月ニ至ツテ完成ノ事。附錄ハ十二月十一日發兌ノ第六卷ト同時ニ發兌ノ事。

（二）豫約期限 明治廿五年七月二十日限リ。

（三）配達順序ハスベテ金圓御拂込ノ順序ニヨリ候。

（四）特別豫約價並製一冊前金四十五錢但シ此特別豫約價ニテ買ヒ得ルモノハ著者ノ關係アル新聞雜誌書籍又ハ著者一身ト親交アル全國各敎育會、新聞雜誌社等ノ會員、購讀者及ビ各地公私學校生徒校員等諸氏ノ證ヲ添ヘテ申込マルル向キニ限ルル事ニテ、即チ此等各位ガ年來著者ニ賜ハリタル眷顧ニ酬インガタメノ微意ニ外ナラズ候。證ハ夫等ノ會費或ハ代金領收書、又ハ校印ニテ宜シク候。

（五）第壹卷ニ限リ見本トシテ特別豫約價並製一部金卅錢

（六）附錄目次、紙質及印刷見本、編纂始末、細則等ハ郵劵二錢領收ノ上進呈イタスベク候。

大辭書無比廉價

大辭書トシテ此無比廉價ノ物トスル爲ノ辛苦ハ實ニ豫想外ニアリ。其大要ハ編纂始末ニ述ブルト同時、著者ハ誓ツテ此辭書ニ關スル一切ノ責ハ殊ニ自カラ進ンデ任ジ、專心必ラズ完成セシムル事ヲ敢テココニ表白スル事。

東京神田區平永町九番地山田美妙方

日本大辭書發行所

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

毎土曜日發兌

東京經濟雜誌

第六百二十七號 目錄 六月十一日發兌

社說 ●銀問題の近況●帝國議會の四大議決●本年の議會は無事なるべし●副島内務大臣の辭職●日本古來の憲法如何

寄書 ●國民の冒險的精神と地理の便否は一國の航海業に關係を及ぼす(瀧與治)● **北海道** 發業奬勵法案を讀む(牛山彌太郎)

始末 ●徳川幕府蝦夷支配始末北海道の經濟問題(久松義典)

墨西國事情 (片山平三郎)●墨國事情一斑

管見一二 ●王代の漢文學(鼎軒)

帝國議會(數件)◎雜報(數件)◎銀行及商業之景況(數件)◎官令(數件)◎定價一册金七錢(市外郵稅五厘增)

東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

自今 **浪華女學校** ト改稱ス

大坂府東成郡清堀村番外十四番

舊一致女學校事 私立 **浪華女學校**

宮中顧問官西村茂樹先生題辭
日本弘道會員風當朔朗先生編纂

日本女鑑

全一册 正價各金拾五錢 郵稅金六錢

我國女子優美の性は、眞に我國獨占の精華ふりかし、此書は著者が美妙なる筆にものして、以上の德性を發輝せしむるを目的とし、女子に敎ふる嘉言善行を纂めしむるものなれば、女子敎科の用として、適當なるは申すまでもなく、家庭にありて婦女子方の頁師たり頁友たり

松本貫先生
永江正直先生 編纂

手工篇

全一册 正價金四拾錢 郵稅金六錢

尋常科の紙糸粘土麥藁葉より、高等の木竹銅線鐵葉鉛を此ふる細工に至るまで、校料及び用具製法等、實際に基きて說き出せるものなれば、今後此科の施設上、其唯一の頁敎科書たるを疑はざるなり、

發兌書林 東京本町四丁目 **文學社**

●明治學院敎授博士フルベツキ君序
トマス、ア、ケンピ著櫻井近子譯

IMITATION OF CARIST. A KEMPIS.

基督之模範

百八十八頁 正價十五錢 郵稅四錢 上製本廿錢

發兌 東京築地二丁目廿二番地 一二三館

賣捌所 横濱地藏坂千五百廿五番 麹町區下六番町 **女學雜誌社**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉強をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふとに心掛け、凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬ、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も茲に入學して日々の進歩目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に敎師を引て敎を受るも甚はだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年一月通信女學の仕組を新設し、每月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學(衛生、育兒、看病と合す)裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田伸子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢(無郵稅)、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後每月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

第四回夏期學校

開校時日　七月十六日ヨリ十二日間箱根驛ニ於テ

校費　金三拾錢

滯在費　一日　金拾七錢

入校　東京英和學校內

申込　田中儀三郎宛

日本鐵道會社、日本郵船會社、兩毛鐵道會社(照會中)割引切符ヲ要スル諸君ハ學校又ハ敎會ノ證明書ニ郵稅二錢ヲ添ヘテ田中儀三郎宛申込アルベシ

寄附金ハ福音新報社、警醒社、護敎社又は東京明治學院內小倉修吉宛御送附ヲ乞フ

雜誌發行 ● 東京市神田區猿樂町二番地 **速記社** ● 速記應囑

●『速記者』ノ發行●速記應囑

速記社ハ速記術ノ眞相ヲ表示スル爲メ每月一回『速記者』ト題セル雜誌ヲ刊行シ弘ク公衆ニ販賣ス

速記者

◎一部三錢十二部前金卅錢◎無遞送料

東京市神田區猿樂町二番地

速記社

速記社ハ帝國議會ノ速記ニ從事シタル上等ノ速記者ヲ以テ組織シ演說議事其他何事ニ限ラズ親切敏捷精妙低廉ヲ旨トシ**速記**ノ御**依賴**ニ應ズ社則ハ御申越次第進呈ス

產婆看護婦

本鄉區森川町十五番地

玉生くに

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌大取次所

所在	店名
東京市本町三丁目	瑞穂屋卯三郎
同 錦町二丁目	武藏屋藤藏
同 尾張町二丁目	東海堂
同 彌左衛門町	嚴々堂
同 表神保町	東京堂
同 出雲町	警醒社
同 鐵砲町	指金堂
同 元富士町	盛春堂
同 雉子町	團々社
福岡縣福岡	積善館支店
神奈川縣橫濱市	共同新聞發賣會社
同	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同 新町竹屋町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戸元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平
京都新町二條	大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

所在	店名
麴町區上六番町	日盛堂
同 三番町	梅仙堂
同 同	福音舍
同 飯田町	三文字屋
同 同	洗心堂
神田區神保町	松江堂
同 同	青柳堂
同 雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積善堂
同 同	正導舍
同 肴町	深田彌兵衛
本郷區弓町	文字堂
同 同	就本堂
同 富士前町	解明堂
同 同	盛春堂
同 二丁目	古河屋
下谷區東黑門町	三一堂
神田區松岡町	山口次郎
同 旅籠町一丁目	榎本
同 鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花堂
芝區櫻田本郷町	鈴木新兵衛
同 南佐久間町	栗原
同 同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
京橋區尾張町	鈴々木
同 出雲町	金盛堂
同	山田屋
本郷區天神町	改進堂
神田區小川町	大塚雜誌店
同 錦町二丁目	貫故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

社告

女學雜誌第三百二十號より改正仕り本號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も**雜誌代金**至急御拂込相成度候。

亦改正致度候間舊號迄の

爲替は**麴町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一 新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一 雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃とも濟にして御送付相成度候

女學、教育學豫約諸君に稟告

女學及び教育學、每月二日を以て發兌致すべきの所、曩に第一號をミ、ヨグラフにて印刷せしに、書中不鮮明の點も有之候に付、今回更に活版に付し出版致度候に付今少々延引致候故豫め爰に謝す。

編輯者

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

冊數	前金	府外
十冊	五十八錢	六拾三錢
廿六冊（半年）	同 一圓四十三錢	同 一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同 二圓六十錢	同 二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

冊數	前金	府外
六冊	三拾五錢	三十八錢
十三冊（半年）	同 七拾三錢	同 七十八錢
廿六冊（一年）	同 一圓三十錢	同 一圓四十三錢

一冊 金六錢 郵稅 金五厘

廣告料及無料廣告

一行	一圓 （廿七字詰）	前金 拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。 二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部 注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

發行所

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三